酉松会新聞 The Yushokai Shimbun

第 10 号

平成 29 年（2017）3 月 1 日 発行

巻頭挨拶

- 緒方　徹（昭 49 卒 会長）:「懈怠比丘不期明日」 P 3

小平 G 人工芝化への期待

- 山根 言一（昭 52 卒）：砂漠化する小平グラウンド　P 4
- 大口 柾文（4 年 GM）：学生側からの想い　P 7

リーグ戦を観戦して

- 志摩 憲一（昭 31 卒）：１部昇格と新たな挑戦　P 8

戦いを終えて

- 中野 圭祐　（4 年 主将）：存在意義を考え続けて　P 11
- 大口 柾文　（4 年 GM）：自分を知ること　P 12
- 甘利 知己　（4 年 メンタル）：目標の、その先　P 13
- 池田　修　（4 年 会計）：ア式と過ごした 4 年間　P 15
- 梶谷 卓矢　（4 年 広報）：振り返って　P 16
- 栗木 春綱　（4 年 広報）：長いとも短いとも言える、４年間でした　P 17
- 近藤 直輝　（4 年 OB）：引退して　P 18
- 手島 拳之介（4 年 イベント）：ライフスキル〈楽しむ〉と〈考える〉P 19
- 野際 大樹　（4 年 用具施設）：戦いを終えて今思うこと　P 20
- 普勝 悠暉　（4 年 イベント）：人生の転機　P 21
- 松井 基宏　（4 年 新歓）：ア式のありがたさ　P 22
- 森本 志朗　（4 年 メンタル）：自分と向き合った 4 年間　P 23

⚽ 寺田 香穂 （4 年 MG）：感謝 P 24
⚽ 山崎 光 （4 年 MG）：集大成 P 25

平成 29 年度シーズンに向けて

⚽ 赤星 真一 （平 4 卒 監督）：関東リーグへの挑戦 ～本編 第 1 章 P 26
⚽ 吉田 圭吾 （3 年 新 GM）：今シーズンの抱負 P 29

海外便り

⚽ 角井 朋之（平 11 卒）：平穏・快適なクアラルンプール生活 P 30
⚽ 諸石 央 （平 12 卒）：シンガポールの Team OB P 32

私の学生 LIFE・今昔

⚽ 神代 祥夫 （昭 29 卒）：思い出あれこれ P 33
⚽ 橋本 昭一 （昭 31 卒）：小平の想い出 P 37
⚽ 山田 充夫 （昭 40 卒）：私のサッカー部生活 P 39
⚽ 小林 治 （昭 53 卒）：学生時代の思い出 P 42
⚽ 田中 耕太郎（昭 53 卒）：公務員さんは呼べんじゃろう P 45
⚽ 五味 正秀（昭 55 卒）：1978 年の夏の日、小平グラウンドで P 47
⚽ 大口 柾文 （4 年 GM）：飲み会 2016 P 50
⚽ 普勝 悠暉 （4 年 イベント）：私が選ぶア式グルメ BEST 5 P 51
⚽ 松井 基宏 （4 年 新歓）：甘利燃ゆ P 54
⚽ 寺田 香穂 （3 年 MG）：三商戦の思い出 P 56

追悼 外岡先輩に捧ぐ

⚽ 山崎 彰人 （昭 49 卒）：“外岡先生”の胴上げに涙 P 58
⚽ 木村 武志 （昭 52 卒）：夫婦を繋いだ“仲人さま” P 59
⚽ 五味 正秀 （昭 55 卒）：粋な“親戚のおじさん”へ P 60
⚽ 佐藤 博子 （昭 54 卒）：外岡さんとの出会いが人生の起点 P 61

編集後記

⚽ 福本 浩 （昭 52 卒 編集長）：10 年目を迎えて P 63

巻頭挨拶

⚽「懈怠比丘不期明日」けたいのびく　あすをきせず

緒方　徹　（昭 49 卒）　酉松会　会長

現役の皆さんは新しいシーズンに向けて意欲的に練習に取り組んでおられることと、大いに期待しています。昨シーズンは輝かしい結果を出すことが出来ました。より強豪を相手にする今年は苦しい場面も多くなるかもしれませんが、臆することなく、諦めることなく、挑戦してゆきましょう。そうした毎日に向かい合う気持ちについての話を紹介します。

現在の茶道に繋がるわび茶を完成させて、公家や高僧だけでなく、広く茶道を武家や町人に広めたのは千利休です。その孫である千宗旦は、わび茶の普及に努めていましたが、晩年になって茶室の不審庵を三男に譲り、自分は裏に隠居のための屋敷を作って、そこに約 2 畳の小さな茶室を構えました。参禅の師である大徳寺の住職、清巌宗渭（せいがん そうい）和尚に茶室の名前をつけてもらおうと茶会に招待したのですが、清巌和尚が時間にやや遅れ、宗旦は急用が出来たのですぐに戻れると思い外出してしまいます。その間に和尚が訪れましたが、「宗旦は外出してしまいました。また明日お越し願いたい」という伝言を聞くと帰ってしまいました。

宗旦が帰宅して茶室に入ってみると、腰張りに荒々しい筆致で「懈怠比丘不期明日」（けたいのびく　あすをきせず）と書かれていました。「怠け者の僧侶には明日は無いのだ」という意味で、明日また来てほしいと言われても保証はできないという痛烈な皮肉です。深く反省した宗旦は、この小さな茶室を「今日庵」と名付けました。今日、只今、即今をいかに大切にしなければならないかを問うているといいます。今日やり残しても明日やれば何とかなるという気持ちが、知らず知らずの内に堕落させてしまうというのです。今日きっちりする人は次もきっちりする。やり残すことがいけないわけではありません。翌日に送る出来事もあるでしょう。しかし「やり残した」という思いと明日を頼む気持ちが問題だという厳しい問いかけです。

三男が継いだ不審庵は表千家として、また今日庵は四男が継ぎ、裏千家として、更には次男が官休庵を開き、武者小路千家として現代の三千家に繋がっています。清巌和尚の厳しい問いかけを実行してゆくのは、凡人にはなかなか難しいことですが、新たな戦いに向かって「今日をやりきる」という気持ちを大切に、日々を送りたいものです。

小平 G 人工芝化への期待

砂漠化する小平グラウンド

山根 言一 （昭 52 卒）

先日、福本編集長と小平グラウンドに行ってきました。
学生はレギュラー組が 8：30 ～10：00 、サブ組が 10：00 ～11：30 で、精力的に練習をしていました（部員が６０名を越え、ボールが足りないので２部制でやっている）。ウォーミングアップから体幹トレーニング、２対１から始まって、３対１、４対２、５対２へと分刻みにメニューをこなしていくさまは、まるでＪリーグのクラブチームの練習を見るよう。その練習方法も時間管理も、我々が現役の頃と比べると様変わりです。ボールは、ほとんど１タッチか２タッチでどんどん動かしていきます。その華麗なるテクニック！相手のコーナー付近を目指して大きく蹴り出す！とか、ひたすらスライディングタックルの練習などまったくやりません。そりゃそうですよね。小学生の頃からＪリーグを見て育ち、サッカーがメジャーな時代に生きているんですから。我々OB も発想の転換が必要だということを実感しました。昔の感覚で小平グラウンドの人工芝化問題を考えてはいけないと思います。

さらに練習をしているところをじっくり見ていると、あちこちで砂煙が上がっているではないですか。競馬場の馬場？ それとも地球温暖化で小平が砂漠になった？ まさに、そんな感じのグラウンドになっていました。水はけも悪そうで、雨が降ったら泥沼状態になり、練習できません。

★防砂・防塵対策として、ゴザやビーニール袋が必須

学生に話を聞くと、小平で練習するのは週に１回くらいで、あとは府中市の「郷土の森公園」にある人工芝グラウンドを借りて練習しているとのこと（２時間で 3,200 円）。対戦相手のグラウンドが全部人工芝になっており、試合も人工芝で行われるため、それに向けた練習が必要なんだそうです。つまり現役たちは、ホームでは試合ができないし、満足な練習もできないということなのです。

★郷土の森グラウンド（府中市）

部員たちの郷土の森グラウンドへのアクセスは、国立から自転車で約 30 分、最寄駅の府中本町（武蔵野線・南武線）からは徒歩 15 分。問題は、ボール・やかん・マーカーなどの備品を小平の部室、または自宅へ持ち帰らなければならないこと。主に 1 年生の部員が分担していますが、練習後に人に会ったりアルバイトに行く時は、駅のロッカールームに預けるのだそうです。これも、ホームグラウンドが使えない「ジプシー・チーム」の悲哀です。

さて、酉松会の幹部会で「小平グラウンドの人工芝化」が検討されているようですが、大きな課題は、何と言っても費用でしょう。人工芝設置工事を手がけている大手建設会社の G 氏（一橋大学 昭 53 卒）に聞いたところ、以下の回答がありました。

★2006 年に行われた、FC 東京小平グラウンドの人工芝設置工事を参考にした。
★人工芝は品質の良し悪しで価格が異なる。品質が良いものは、おそらく 10,000 円/㎡ 程度。
★地盤の排水等造成工事は 10,000 円/㎡、下地の舗装が 4,000 円/㎡ なので、
　直工で 24,000 円/㎡、経費等を加えると、24,000 円/㎡ × 1.2 = 28,800 円/㎡。
　従って、10,000 ㎡ 程度のグラウンド（100 m × 100 m）では、2 億 8,800 万円になる。
★照明設備と防球ネットは、それぞれ 3,500 万円程度。
★下地の舗装なしでも人工芝の設置は可能のようだが、耐用年数は短くなる。

「品質がそれほどのものでなければ、5,000 円/㎡ くらいですかね」と言われましたが、それでも人工芝の設置だけで 5,000 万円かかります。この費用をどうするかが最大の課題です。現在の酉松会費の収入額が年間 400 万円程度ですので、OB だけで工面するのは大変です。

FC 東京と学芸大学が連携して学芸大学のグラウンドを人工芝化したようですが、外部との連携を模索できる道はあるのか・・ラグビー部が、どのように人工芝化したのか・・外部への貸し出し等の方策はあるのか・・昨年小平の体育館を建て替えたようですが、砂漠化したグラウンドによる外部への悪影響に対して、大学当局はどのように考えているのか・・など、いろいろな面からのアプローチが必要な気がします。ラグビー部を見ていると、OB 会の強い意志が必要なのかもしれません。東京都 1 部に昇格しても、グラウンドの問題でホームゲームを開催できないという状況は、現役諸君に大変申し訳ない気がします。今一度、真剣に小平グラウンドについて、みなさんの知恵を出し合ってみませんか。

★年々、廃墟のようになっていく小平グラウンド

学生側からの想い

大口 柾文 （4 年 GM）

人工芝にしないという選択肢はありません。一橋大学ア式蹴球部が東京都 1 部に留まらず、関東へ挑戦していく組織である以上、小平グラウンド人工芝化は必ず達成しなければなりません。ハード面の整備がこれまで以上に求められています。ここ 5 年間ほど、現役はソフト面での改善を積み重ねてきました。ユニット制の導入を始めとする組織体制の刷新によって、各方面において柔軟で素早い意思決定ができるようになりました。チームの信頼関係を良好に保ち、前向きな雰囲気の中でサッカーができるようイベント等も戦略的に行うようになりました。またチーム理念の策定による目指すべき理想像の具体化は、部員数が拡大する中で見失いがちな指針を常にチームへ示してくれています。そういった試行錯誤はすべて、トレーニングマッチを含む全ての試合でグッドゲームをしながら勝利していくためのものです。昨年の結果は、ここ数年のソフト面での取り組みが結実したものだろうと考えています。

一方、ハード面はほとんど良くなっていません。小平グラウンドの質は悪くなるばかりでボールやマーカー等の備品も慢性的に不足している状況です。人工芝のグラウンドを借りることもありますが、利用できない時期も多く、時間の制約も厳しいため満足できる環境とは言い難いでしょう。来年度からは土曜日に講義が開講されるなどカリキュラムも変化し、これまでのように練習できるか不透明な状況です。小平グラウンド人工芝化も、私が入部した 4 年前の時点で既に「提起はしているが、いつできるか不明」な状況でした。誤解を恐れずに言えば今も状況は変わっていないと思います。そのような中で、今期一橋大学ア式蹴球部は 36 年ぶりに東京都 1 部で戦います。多くの方がご指摘の通りホームグラウンドが人工芝ではない大学は 1 部においてア式だけです。

現役は様々な困難を乗り越えて 1 部昇格を達成しました。それは昨シーズンだけに留まらず、36 年間を通した試行錯誤も含んだものと言えるでしょう。現役 OB を問わずア式に関わる全ての人が成し遂げた、この成果をきっかけにしない手はない、そう強く思います。今後ア式が 1 部で常に関東リーグ昇格争いを演じるチームになるために、現役と OB の関係性をこれまで以上に発展させるきっかけにしなければなりません。そして何より人工芝化プロジェクトを実行に移すきっかけにしなければならない。「いつかできたらいいね」ではできません。 1 部昇格も「必ず今年成し遂げます」と 1 年前に申し上げました。「必ず人工芝にする」という決意を、もっと具体的にしていかなければならない。資金という高いハードルがあるのはわかっています。ですが、ア式は誰にとってもそれだけの投資をするに値するチームです。関東へ昇格しつつ、学生主体の素晴らしい組織として大学サッカーを活性化していくような、そんな将来のために今年を人工芝化実施の元年としなければならないでしょう。

リーグ戦を観戦して

1部昇格と新たな挑戦

志摩 憲一 （昭31卒）

平成28年10月23日、一橋サッカー部は36年ぶりに念願の東京1部昇格を果たすことができた。この日は2部の春秋リーグ戦を締め括る最終戦で、2位一橋と3位武蔵大が　互角の勝ち点33点で並び、1部昇格を決する大一番となった。ここまでの戦績を見ると、得点力はリーグ得点王がいる武蔵が上（一橋には得点ランク2位がいる）、守備力はGKを要に安定している一橋が上と、総合力は拮抗し息詰まる接戦が予想された。試合開始を前にして、私は豪腕戦前派の高橋朝次郎大先輩（昭和2年卒業、元キリンビール社長、ご子息も一橋サッカー部を昭和28年に卒業）が、「ここ一番の大勝負の時は火事場の馬鹿力を出せ」と昭和9年時の現役を叱咤激励された檄文を思い出した。

試合は首都大学グラウンドで行われ、前半立ち上がりの緊張もあってか12分武蔵に先制を許したが、慌てることなくチャンスを窺い21分に追いついた。勝負は後半に持ち越されたが、一進一退の攻防の中、集中力に勝った一橋が15分に勝ち越し点、32分に駄目押し点を加え、3対1で逆転勝利した。天晴れ、やってくれました。現役諸君にとって、「やろうと思えば馬鹿力が出るんだ」という体験が、これからの人生の大きな自信に繋がったと思う。この日は待ちに待った昇格の決戦を観ようと、これまでになく大勢のOB・OG、父兄、友人の皆さん、フィアンセらしきメッチェン（注）など、多彩なサポーターが駆け付け、血圧・心拍数を上げ、時計を気にしながらボールの動きに一喜一憂した。現役応援団も必勝の願いを込めて進撃ドムを打ち鳴らし、声を限りの応援歌を送った。勝利のホイッスルで応援席ではハイタッチ、現役は滅多に見られないキーマンの胴上げでボルテージを上げ、目標達成を喜び合った。

※編集長（注）メッチェン＝ドイツ語で少女・娘、旧制高校生が愛用

振り返ると36年の壁は、いかにも長過ぎた。現役はどうして壁を破れたのだろう。思えば5年前の2部昇格の時から現役は総力・創意を結集し、この壁に立ち向かうべくユニット制を採用して、テクニック・フィジカル・メンタル・広報・新歓・後方支援など専門分科会的に課題を深掘りしながらレベルアップしてきた。これらの5年間の積み重ねによる質的な成果が今回の昇格の原動力となった。更に、ここ数年のプロトレーナーの先生方による一橋の体質に合った適切なご指導も、心・技・体の潜在能力を引き出した。加えて、サッカーの普及や新歓の効果もあってか新入部員が毎年20人強を数え、選手層が格段に厚くなった。これが最近の戦力の量的底上げに寄与した。こうした質量両面の現役部員の直向きな自助努力こそ、今回の昇格の核心として最も賞賛されるべきことである。「継続は力なり」1部昇格したこれからも、更に活性化することを期待したい。

今年は昨年の昇格の年から一転、１部挑戦の年となる。１部は新参者を蹴落とすところと心得よう。蹴落とされないよう踏み止まらなければならない。とは言っても特効薬はなく、地道に偏差を解消していくことになる。いろいろ方策はあろうが、私見を述べれば昨年 12 月の昇格祝勝会で、１部対応策として述べた通りである。

１．テクニック・フィジカル・メンタルの各面において、「正確さ・賢さ・速さ・高さ・強さ」の、それぞれ２割アップを目標とする。

【説明】
ハリルホジッチ日本代表監督が 2017 年の W 杯アジア最終予選に向けて代表選手に示した達成目標の狙いと同じ考え方に基づき、一橋レベルに置き換えた。代表選手の目標内容は、○試合走行距離 ○スプリント回数 ○スプリントスピード ○デュエル（１対１）激しさ・うまさ ○シュート枠内 ○クロス成功率 ○相手のボール保持時間の短縮などで、それぞれ実測値と目標値を並列している。目標値には達成感というリターンがあるのが味噌である。

２．１部のレベルに対応した個人の基礎プレイと、得点・失点に直結するコンビプレイの練習メニュー、及び、攻・守にわたる戦術マニュアルを整備する。

【説明】
趣旨は 36 年間の２部・３部の時ならいざ知らず、１部の常連となるには一定水準の戦力維持が要請される。そのためには、歴代受け継がれている武芸家伝書のような練習・戦術の虎の巻が求められる。主眼は・・

①サッカー競技の構成要素となる各種基礎プレイを、１～２年の間に目標を設けて反復練習し、習熟後、高学年で実践活用する。
②限られた練習時間の中で、得点力・守備力の向上効果の高いコンピプレイ（含セットプレイ）を息が合うように練習する。
③攻撃戦術面はオーソドックスなサイド・センター攻撃、セットプレイ、ミドルシュートが基本となるが、３次元、裏、タレントなど多様な条件による一橋流のバリエーションも加えてポートフォリオを構成する。守備戦術面は国境に壁を築くように１対１、バックアップ、３次元 GK 連携など、固い防御策を練る。最終的には攻・守併せて、実戦用の戦術マニュアルを集大成する。

以上、本マニュアルは多くの選択肢があり、工数がかかるので、中堅ユニットにより編集すると良い。

私は自宅が荻窪で、小平を始め東京西郊の各大学のグラウンドには距離的に恵まれていたこともあり、会社を 65 歳でリタイアしてから昨年まで、19 年間、リーグ戦の大半を観戦してきた。この間、史上唯一の 3 部昇格や 2 部昇格は 3 回を数えたが、 1 部昇格は待てど暮らせど吉報がなく、目の黒いうちに間に合うかと気を揉んでいたが、やっとやってくれた。長年の願いが叶い、思い残すことがなくなった。

私も、今年はとっくに観戦耐用年数を越えた 85 歳で、酉松会会員の皆さんに後を託す年となった。そこで思い出すのは、大正 15 年卒業の松本正雄大先輩（元最高裁判事、元東京第二弁護士会会長、一橋ア式蹴球部創部発起人）の現役サッカー部員に対する慈しみ深い物心両面にわたる親分肌の支援と指導である。「サッカーやるなら徹底的に打ち込め。後、乞われれば就職や結婚の面倒は見る」と言われ、事実その通り実行された。

不肖私も大先輩の後輩思いを見習うと共に、現役学生時代に戴いた恩返しを含めて、会費納入や応援による志気高揚、若さとの触れ合いを続けてきた。私事で恐縮ながら、サッカーが取り持つ縁で結ばれたこと、また就活はリーグ戦日程を優先で会社が決まるなど、人生の節目節目で宿命的に関わってきたサッカーへの思い入れもあったのだろう。終わりに、世事喧騒、多事多端の折ながら、大先輩の創部 95 年来の男意気の一端を継承し、物入りの 1 部昇格や部員増に対応し、物心両面の現役支援を託したいと願うものである。

★昭和 10 年頃の小平グラウンド

存在意義を考え続けて

中野 圭祐 （4 年 主将）

３6 年ぶりの 1 部昇格。名誉すぎる結果を残すことが出来て本当に嬉しく思います。去年と何が違ったかは正直わかりません。本当に紙一重だと思います。ただ、今年の部員たちの取り組みが昇格に値したということは自信を持っていいと思います。私たちの代に関する昇格の要因としては、下級生としての 3 年間が非常に大きな意味を持っていました。私の代は上 3 つの代を合わせたような代です。先輩が好きでいつもそれぞれ仲が良い先輩と一緒にいました。その中で、全員が多くの先輩の考えや想いに触れて 4 年になりました。それが今年のチームの色をつくり、 4 年の色を創ったと感じます。あらゆる場面でお世話なった上 3 代には本当に感謝しています。

私の 4 年間は自分の無力さを痛感するものでした。怪我や調子の悪さでピッチから退くことが何度もありました。そのような時は自分の存在意義について本当に悩みました。自分が主将をやれるのか考えることもありました。周りの思考の深さに触れて情けなさを感じることも多々ありました。うちの代には梶谷や野際、手島といったプレーで人を惹きつける選手がいます。そして、プレー外で人を惹きつける力を持つ人間が多くいました。その中で自分に何が出来るのかを必死に考える 4 年間でした。その緩むことが出来ない状況と、そのような同期の存在が何とか私をここまでもってきたと考えます。今年はそのような同期と活動できることが楽しくて仕方ない 1 年でした。

一橋ア式蹴球部という組織は部員に多くのことを考えさせる組織であり、部員自身にも考える人間がたくさんいます。自分と向き合い、弱さを認めた上で部に何を果たせるかを多くの人間が考えています。だからこそしっかり考えないと置いていかれるし、自分の考えの浅はかさに失望します。このような環境に身を置けたことは自分にとって大きな価値となりました。自分の弱さ、強み、人の考えや人との関わりを深く考えられる環境でした。4 年間、ここで多くの助けを得ながらサッカーをやらせてもらえたことは感謝してもしきれません。最後になりますが、今年 1 年ご支援　くださった OB の皆さま、本当にありがとうございました。最高の結果をお届けすることが出来て本当に良かったです。来年はまた新しい目標を目指すことになりますので、後輩の応援よろしくお願い致します。私自身も、これからは OB としてア式蹴球部を支えていければと思います。

自分を知ること

大口 柾文 （4年 GM）

自分探しの旅、とよく言いますが、旅に出るのと同じくらい何かに打ち込むことも自分を知る大きな手段だと思います。その意味で、ア式蹴球部は素晴らしい環境でした。メンバーに選ばれる・選ばれない、怪我をする・治る、仲間が部を去る・新しい仲間が増える、誰かと亀裂が走る・仲直りする、勝つ・負ける、様々な出来事を通して自分の価値観、感情の変動を感じてきました。それが自分自身を理解するベースになったと強く思います。これは今後の人生に向けても自分の大きな財産になりました。そしてもっと言えば、GM という経験が自分自身をさらに深く理解させてくれたと思います。

「大口、この野郎、どうして俺を出さないんだ」とチームのみんなは何度も思ったことと思います。そういう思いを感じながら過ごす1年でもありました。メンバーを選び、交代を決めるわけですが、その I リーグの試合も、いつも通りに決めました。後半途中から出場させた後輩が活躍して、ビハインドから追いつき引き分けに持ち込めました。彼は試合後、僕のところへ来て「どうしてスタメンで出さないのか、俺の持ち味わかっているのか」と強く詰め寄ってきました。誰しも誰かしらの人生を変えうると思いますが、GM はその程度が誰よりも強いと思います。その時彼を試合にスタメンで使わなかったことで彼の人生は変わったし、ここまで熱く思いをぶつけてくる彼に、どういう言葉をかけるかによっても彼の人生は変わると思いました。そして自分自身にも色々な思いが湧き上がるのを感じました。「そんなこと言われたって俺には俺の決め方が・・でも彼の言う通りではないのか・・それよりも、まず今、彼にどう思われているのだろう・・」ネガティブな感情が多かったのを覚えています。それでも一番大きかったのは「こういう人のために自分が GM として役割を果たそう」という思いでした。彼がこの先もこの部で一所懸命に頑張っていくために何かアクションできるのは自分しかいないし、そうする責任がある。その一心で話したことを覚えています。「不満はわかる。だけど今必要なことは明日からの練習で、その思いを胸に、腐らず精一杯プレーすることだけじゃないのか？」彼が、その時どう思ったのかはわかりません。もしかしたら悪い方向に行ってしまったのかもしれないし、彼にとっては、もう忘れてしまった事かもしれない。それでも、あの瞬間は、僕の4年間で1、2を争うくらい大きく感情を揺さぶられた出来事でした。価値ある経験だったと思います。GM というポジションと彼に感謝しています。

末筆になりますが、今シーズンもご支援とご声援ありがとうございました。OB の皆様に暖かく見守っていただけたからこそ1部昇格という結果につながったのだと思います。ご意見やご指摘を頂戴することも多々ありましたが、最後は、現役のやりたいようにやらせていただきました。現役と OB の理想的な距離感だったのではないでしょうか。過度に口出しをしたり、丸投げではいい関係性は築けません。どうぞ来年以降も現役をよろしくお願い致します。

目標の、その先

甘利 知己 （4 年 メンタル）

「勝ったものにしか見えない景色がある」
高校時代に顧問の先生に言われた言葉です。18 年間サッカーを続けてきて目標を達成して終わるのは初めてでした。最終節の武蔵戦は、ホイッスルが鳴った瞬間、鳥肌が立って涙が流れました。でもその興奮は一瞬で、どちらかというと身体からいろんな鎖が取れていくような、そんな感覚になりました。ほっとしたというか、自分たちがやってきたことが間違ってなかったんだと思いました。ここまでくるのにア式としては 36 年間、自分としても 4 年間もかかりました。それなのに実感は、あまり湧きませんでした。試合が終わって出場したメンバーがダウンしているときも、昇格の実感はあまりなくて、でも、みんな笑っているのが新鮮で、嬉しかったことは覚えています。

2 部の頂に立つことは出来ませんでしたが、僕らは勝者となりました。勝った先に僕が見た景色は、結果はおまけでしかないということです。引退した後よく思い出すのは、上手くいかなくてもがいていた時期とか、ユニットで悩んだこととか、最終節前の自信に満ちたみんなの顔です。どんな結果だったとしても、自分たちがやってきたことや考えてきたことの価値は変わらないということを痛感しました。1 部昇格という結果がもたらしてくれたものは、僕らは強いと周りに示せたこと、応援してくれた全ての人への少しの恩返し、さらに高いレベルのステージ、そして一瞬の高揚感です。結果はどうでもいい、ということではありません。素晴らしい試合をして勝つことは、僕らが応援してくれた人にできる唯一の恩返しだし、チームとして上のステージに上がることはとても重要なことです。でも、最後に目指したところに届かなくても、本気でそこにたどり着こうと取り組んだことには価値があると思います。勝ったからと言って、全てが正しかったわけではないし、負けたからと言って全てが間違っていたわけではないと思います。当たり前のことですが、昇格できたからこそ、心からそう思うことができています。

ダラダラと書いてしまいましたが、要は取り組んできた過程が、すごく価値のあるものだったという当たり前のことです。苦しんだり考えたりした経験は、これからの自分の人生を支えてくれると思います。過程で経験したことは一生ものです。きっと同期とは 1 部昇格という結果をつまみに一生酒を飲むと思いますが。来年後輩は 1 部という舞台で戦います。後輩達は頼もしい人ばかりで 1 部で暴れてくれると思いますが、なかなか勝てない時期もあるかもしれません。そんなとき、ぶれないでほしい。方向性を間違えないようによく考えて、よく話すことは大事ですが、自分やチームが正しいと思うことを突き詰めてほしい。そしてどんな状況でも 1 部で戦えていること、サッカーができること、周りに仲間がいることの幸せを噛み締めて、毎日を楽しんでほしい。何となく過ごしてしまいがちな 1 日は、本当に貴重な 1 日なんです。

4 年間一橋大学ア式蹴球部で活動できて、本当に幸せでした。今後は 1 人の OB として、ア式の活動を見守っていこうと思います。他のことを何も考えずにサッカーに集中できたのは、OB の方や親をはじめ、応援してくださった全ての人のおかげです。この場を借りて深く感謝申し上げます。

★2016. 10. 23 リーグ最終戦 vs 武蔵大 3 : 1 で勝利し、 1 部昇格を決める

ア式と過ごした４年間

池田　修　（4 年 会計）

この４年間の大学サッカーは、最も濃密な４年間だった。一人では何もできないこと、仲間との信頼関係を築くことの重要性と必要性を学んだ１年目。リーグ戦出場のためには A チームの選手以上の努力と自己管理が必要だと学んだ２年目。スタメン出場しても結果を残せない自分が情けなくてメンタル的に自滅し、メンタルの重要性を学んだ３年目。３年間の反省を活かし、どんなミスをしようがメンタルと集中力だけは保つことができた４年目。日々の練習や試合、仲間と過ごす時間の中で、色々なことに気づかされ、教えてもらい、学ぶことができた。自分に本気で関わろうとしてくれる先輩や同期、後輩に恵まれたことは本当に幸せだと思う。ア式の環境と仲間に恵まれたからこそ、人として成長できた。ア式に関わる全ての人に感謝しています。ありがとうございました。

１部昇格という結果は、たまたま僕たちの代が最上級生の今年に果たせただけだと思う。ただ１つ自信を持って言えるのは、一橋大学ア式蹴球部は間違いなく１部昇格にふさわしいチームだということ。先輩方が築き上げてきた歴史、サッカーに真剣に取り組む姿勢、そしてア式への「愛」がグラウンドでのパフォーマンスを後押ししてくれて 36 年ぶりの１部昇格につながった。最終節の OB・OG の方々の応援や試合後の喜びの姿を見た時、結果が出て本当に良かったと思った。

個人として優秀 GK 賞を受賞できたことは、４年間の GK６人の仲間との取り組みが肯定されたようで非常に嬉しい。えびさん、のむさんは生意気な僕をかわいがってくれた。えびさんの情熱と、のむさんのコーチングは今年の僕の土台だった。後藤さんの神セービングほど派手なパフォーマンスはできなかったけど、メンタルの重要性と僕の弱点を指摘してくれた。栗木にはプレーのアドバイスだけでなく練習の雰囲気作りで助けられた。栗木が同期で本当に良かったと思う。大内は僕と栗木に甘えるかわいい後輩。これから暴れまわって欲しい。根木は難しい決断だったと思うが GK を選んでくれて感謝している。大内と共に切磋琢磨して欲しい。この６人がいなかったら今の自分はないと思う。本当にありがとう。

後輩のみんなには１日１日を大切に過ごして欲しい。何となく過ごせば４年間はあっという間に終わってしまう。意識高く過ごす日々は、間違いなく今後の財産として自分の中に残る。自分の目標、チームの目標を達成するために自分が何をしなければならないか、何をすべきかを問い続けながら努力して欲しいと思う。来年１部のチーム相手に本気で戦う姿を楽しみにしています。

振り返って

梶谷 卓矢 （4年 広報）

OBや保護者、関係者のお力添えをいただき、何とか自分たちの大学在学中に東京都1部昇格を成し遂げることができたことに、安堵しています。それと同時に、3年前や1年前に昇格を目の前にして逃してきた結果、都1部という自分にとっては夢のような舞台でサッカーをすることができなかった悔しさもありますし1つ上のステージでリーグ戦を戦うことができる後輩たちを非常に羨ましく思います。自分が在籍した4年間で、この部の環境は大きく変わったように感じます。入部した時に比べると、サッカーのプレーや戦術的な面はよく練られるようになりました。人数も増え選手層も厚くなった分今では一人一人が頭を使ってサッカーに取り組まなければ、試合に出続けることができないと思います。運営の面でも、入部当初は駆け出しであったユニット制は年々充実し、組織として無くてはならないものとなりました。そんな大学サッカー4年間を通じて、最終的に各チームが得る成績というのは結局順当なのではないかと考えるようになりました。努力に見合った結果が与えられるということです。

3年前、前期から一転、勝ち点を積み重ねることができず昇格を逃したこと。2年前、最後まで残留争いを強いられたこと。1年前、下位チーム相手に敗れ涙を呑んだこと。そして今年、決戦を制し昇格を掴んだこと。全てがその年の取り組みを示しているのだと考えています。その中で過去3年と同じかそれ以上に苦しい時期はあったものの、今年はそれを乗り越え、地力で勝負を制すことのできるチームになりました。先輩方の取り組みの積み重ねがあってこその昇格であるということは言うまでもありませんが、今年1年間に関しては、1部昇格のために力を注ぎ続けることができた自分と、互いを補完し合いながら一つになってチームを牽引した同期を、誇りに思っています。最後に、これまで支えてくださったOB含め関係者の皆さま、本当にありがとうございました。後輩たちには過去や現状に固執せず、革新を続け、一橋大学ア式蹴球部の歴史を塗り替えていってほしいと思います。

★東京都大学サッカー連盟表彰式
2016. 12. 23

ベストGK賞：池田　修　・・左
最優秀選手賞：梶谷 卓矢　・・右
（FW 16 ゴール）

長いとも短いとも言える、４年間でした

栗木 春綱 （４年 フィジカル）

個人的な感想で言えば、とても充実した長い４年間でした。毎年昇降格争いを最終節まで繰り広げ、一瞬たりとも気の抜けない緊張感の中で戦い続ける・・負けても前を向き、勝っても常に進化を目指し、そして最後は悲願の１部昇格という形で締めくくる・・これ以上ない４年間だったと改めて感じます。しかし、これは自分達の偉業だとは思いません。この部を形作ってきた全ての方の行動の結実だと思います。

そもそも部活はとても新陳代謝の激しいチームだと思います。１年ごとに多くのメンバーが入れ替わり、同じ部員も４年間しかいない。80 年以上の歴史を持つ一橋ア式蹴球部から見たら、僕らの４年間なんて短いものです。しかし僕等は、そんな入れ替わりの激しいチームの中でも「一橋らしさ」というものを先輩から確実に感じ取り、受け継いできました。監督がいない中、全力で考えて行動すること、サッカーを楽しむこと、チームメイトと家族のように仲良くなること、本音をぶつけ合うこと、応援で声を枯らすこと、飲み会は全力で楽しむこと、一発芸を事あるごとにやること、麻雀、などなど・・他にも言葉では表しにくいものがたくさんあります。少しずつ変わっている部分もあると思いますが、こういうア式らしさの根っこの部分を先輩方が受け継いでくださったことが今のチームを形作っていると思います。僕らもどれだけのことを後輩に残せたかわかりませんが、来年も一橋ア式の良さを存分に出しながら１部で暴れてくれることを信じています。この場を借りて、これまでご支援いただいた OB・OG の方々に感謝の言葉を言わせていただきます。本当にありがとうございました。

引退して

近藤 直輝 （4年 OB）

2016年10月24日、夕飯を食べる時、思わずスマホを取り出し写真を撮ろうとした。「あっ、別に写真撮らなくていいのか」と撮る直前に気付き、スマホを置いた。もう毎食の写真を撮らなくてもいいことに対する少しの安堵と、引退したことに対する強烈な寂しさを感じたことを覚えている。思えばア式に所属していた時、生活のあらゆる場面にサッカーやア式が介在していた気がする。毎回の食事はもちろん疲労回復のための風呂上がりのストレッチや睡眠時間の確保など数えたらきりがない。練習がある日もない日も、朝から晩までどこかで否応なくサッカーについて向き合う時間があった。

そんな緊張感のある生活から解き放たれ、2ヵ月が経った。現役時代なかなか会えなかった高校の同期に会ったり、自分の趣味にとにかく没頭したり、楽しいことはいくらでもあった。しかし、やはりどこか物足りなさを感じていた。 ア式で過ごした日々は楽しいことや嬉しいことばかりではなかった。むしろ悔しいことや辛かったことの方が多かったかもしれない。同期が次々と試合に出て活躍している中、試合に出ることすらできていないことに対する悔しさやもどかしさ、そして時には自分がどれだけこのチームに貢献できているのか、今やっていることが本当に正しいのか悩む時期もあった。それでも壁にぶつかってはそれと向き合うことを繰り返す中で、自分の役割を常に模索しながら活動していた。

引退して改めて、自分が過ごしたア式蹴球部での日々の素晴らしさを実感している。嬉しいことも楽しいことも悔しいことも辛かったことも、全てが高いレベルで詰まった体験は今後出来ないかもしれない。今の後輩たちには、とにかくここでの日々を大切に、そして、がむしゃらに生きて欲しい。そこでの取り組みの結果はあくまで過去の実績としてしか残らないけど、その過程でどんな風に考え行動したかは今後にも絶対活かせるはずである。OBとして1部で戦う後輩たちの応援に行くことを非常に楽しみにしている。

ライフスキル〈楽しむ〉と〈考える〉

手島 拳之介 （4年 イベント・応援）

まずは昨シーズン、1部昇格という最高の形で終えることができたことを本当に嬉しく思います。それと同時に、OB、OGの皆様の継続的なご支援あってのものであったと感じています。本当にありがとうございました。そして今後も変わらぬご支援をよろしくお願いします。さて、自分自身の4年間を振り返ると、決して順風満帆ではありませんでした。1年次には大学サッカーのスピード感、フィジカルの強さになかなか順応できずに苦しむ日々。そして、それを尻目に活躍する同期の存在。2年次にはなかなか結果の出ないチームに対して自分が果たすべき役割に苦しみました。3年次には個人としては結果を残せましたが、チームは昇格を逃しました。チームで結果を残すことの難しさを知りました。

そして、あっという間に4年生になりました。私が最上級生になって意識したことは1つだけです。それは「楽しむ」こと。3年間過ごしてきてア式が好きだということだけには自信を持っていました。残り1年と考えた時に、この貴重な1年を楽しみたい。そして後輩たちには、この部の楽しさを知ってほしいと思いました。ピッチの上で楽しむことはもちろんですが、私はイベント・応援ユニット長として、イベントを通してみんなを楽しませるという使命を勝手に背負い、実行しました。月に1回ぐらいのペースで、合計10回以上のイベントをシーズンを通してやってきましたが、個人的に1番印象に残っているイベントは、昨年10月14日に行ったフットベース大会です。授業の関係で参加できなかった部員がいたのは残念でしたが、大いに盛り上がりました。自分自身楽しむことができましたし、タイミング的にも秋季日生戦の後という'絶妙な'タイミングでできたので、とても価値のあるものになったと思っています。

もう1つ忘れられない'イベント'がありました。10月23日12時20分から始まった、そのイベントは、100人を超える応援団に見守られ、まさに夢のような90分でした。私にとって、私たちにとって、かけがえのない財産となりました。大事な試合、忘れちゃダメな試合、忘れたくない試合、そんな最終節をプレゼントしていただいた一橋大学ア式蹴球部に関わる全ての人に改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

戦いを終えて今思うこと

野際 大樹 （4 年 用具施設）

まずは 1 年の 9 月という中途半端な時期での入部を認めてもらいそして最後まで応援して下さったこの部に関わる全ての人に感謝したいと思います。ありがとうございました。あの時期の入部という決断が、これまでの人生において最も重要な決断だったと、今思います。そのおかげで、こんなにも出会いに恵まれ、環境に恵まれ、思う存分サッカーに打ち込み、かけがえのない瞬間を味わうことができました。あの決断をしていなかったら全く違う 4 年間になっていたかと思うと、あの時に 4 月を過ぎても声をかけ続けてくれた同期には、とても感謝しています。

この部で過ごした約 3 年間で自分は多くの経験をしました。昇格争いもしたし、降格争いもしました。消化試合は 1 試合もありませんでした。これもまた貴重な経験で、その積み重ねによって今年の最終節では 1 点ビハインドからも慌てることなく、ただ自分のプレーに打ち込めたのかなと思います。さらにそこには「信頼」という、このメンバーで築き上げたものがありました。
この前線の選手たちなら必ず点を取ってくれるから大丈夫。この中盤の選手たちなら最後まで攻守に駆け回ってくれるから大丈夫。この守備陣なら 1 点くらいで浮足立つことはない。このベンチメンバーは誰が出てきても大丈夫。この応援のメンバーはきつい場面に立たされた時、必ず支えになってくれる。この全員への信頼によって、あの日の逆転勝利は成し遂げられました。このことは自信を持って言うことができます。この信頼関係が出来上がったのは日々の積み重ねからで、今年の 4 年が掲げた、「良い関係性から良い結果は生まれる」ということは間違いではなかったと強く感じた試合でした。

今年の 4 年は、ここまで育てて下さった先輩方、様々な面で応援してくださる OB の方、そして最後まで共に闘ってくれた後輩たち、すべてに恵まれた代だったと思います。怒ったりすることが苦手で、ふざけることが大好きなこの 4 年のメンバーで、そのカラーを存分に出し、それでもついてきてくれた後輩たちには感謝しかありません。そんなメンバーが、来年 1 部という今年よりもさらにレベルの高い舞台で闘う姿を観に行くことが、今から楽しみで仕方ありません。最後になりますが、本当にここまでご支援してくださった OB の皆様ありがとうございました。皆様のおかげで最高の引退を迎えることができました。今後とも後輩たちのご支援を宜しくお願い致します。

人生の転機

普勝 悠暉 （4年 イベント・応援）

2016年10月23日、僕ら4年生は36年間先輩たちが目指していた目標である1部昇格を達成することができました。そして、そのために尽力していただいた先輩・後輩・マネージャー・OB・そうそうたるコーチ陣には感謝の念が尽きません。また自分が4年間サッカーをする上で一番のサポーターであり、理解者であり協力者であった両親には、今ここで改めてお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。

僕は二浪して今の大学に進んだわけですが、部活に入る気もなければ、入ったら入ったで試合に出ることしか考えていなく、自分の試合以外無頓着でした。ですから僕の今の同期や先輩は、僕には無かったパッションを持っている、ある意味まぶしい存在であり、同時に煙たい存在でもありました。サッカーする以外のことに時間をかけたがり、無駄に礼儀にこだわり、非効率な集合時間を厳守する・・正直「なんだ、こいつら」って感じでした。今にして思えば、プロになれるわけでもない自分が何をこんなに偉そうにしてんだと叱ってやりたくなりますが。二浪するくらい自分に甘く、クラブチームなどで足もとには自信があり、人間的にひねくれていた自分には、当時のア式は本当にこんな風に見えてました。ただ朱に交われば赤くなるとはこのことで、この4年間、本気で何かに取り組むという姿勢や気持ちを上からも下からも見せつけられては、変わらざるを得ないというか、変わりたいと思う自分が生まれました。真摯にサッカーに取り組むと結果としても現れてきて、ちょくちょく上に交わる事ができるようになりました。しかし、その時はまだサッカーに対し真剣に取り組むということだけで、チームを意識することはなかったように思います。

チームの勝利を本当に願えたのは、4年生になってからでした。初めて長期のケガをしました。現役をベストでやれることはないと言われました。今までの僕なら腐ってやめていたでしょう。しかし、そこで僕に、「今、僕にできることは何か」と考える時間が生まれました。それが後輩との雰囲気作りであり、応援だったように思います。同期の中では一番鈍い活躍ですが、悔いのない最後でした。最後の引退試合で皆からかけられた声援は、涙が出るほどうれしかったです。
最後に、僕が一番ア式を終えて獲得したものは、for the teamの精神だと思います。これは社会に出ても大きな財産になることで、4年間、辛い思いも楽しい思いも経験しないと決して得られないものだと思います。なんだかんだア式ともサッカーとも長い付き合いになりそうです。

ア式のありがたさ

松井 基宏 （4 年 新歓）

小さい頃はよく野球をしていた。父も 2 人の祖父も阪神ファンで、サッカーの色は松井家には無かった。それが幼稚園の友達に誘われたことにより急にサッカーをすることになった。そこから中学までクラブチームで過ごした。個人の技術に重きを置いていたチームで、よくリフティングとかドリブルの練習をしていた。高校になっても基本的スタンスは変えずにドリブルをしていた。これが高校までのサッカー。

大学になってのサッカーは全く別。別の発見ばかりだった。サッカーはボールを持ってないときの方がむしろ大事な場合があって、大学でのサッカーは、ほとんどそっちに自分の方向を向けていた。攻守におけるポジショニング、ボールを受けた後よりも受ける前、攻めているときに守りを、その逆も然り、という風にボールを持ってないときに何をするかってことばかりを考えていた。これは辛いことが多かった。守備やポジショニングっていうところは貢献度が目に見えにくいからだ。だからオフザボールにこだわってやり続けることは、それを正しいと思える根拠がなければならなかった。自分の場合は、 0 失点の試合と 2 得点の試合の勝ち点は前者の方が高いというデータやチーム分析を信じてやり続けた。後輩や試合に出てない選手が認めてもらう為にはそれでも目に見える貢献をせねばならず、それが満足にできないときは自分が試合に出ても大丈夫かとネガティブになることもあった。そんな自分を使ってくれたり、応援したりしてくれたことは本当に感謝しています。ありがとうございました。

中学でも高校でもリーグ昇格を経験してきたけど、今回が一番嬉しかった。達成するのに 4 年かかったというのもあるし、今までで一番目標に向かって真摯に取り組んだからだと思う。昇格が決定した試合直後は一番声をあげて泣いてしまった。そのような経験が今後の人生であるかどうかも分からないというくらいのものを味わえたと思う。そのせいか部活を終えてからは大げさに言えば、何を糧に生きればいいか分からなくなってダラダラとした生活を送ってしまっている。何かの目標に向かい、それを疑わずに行動ができていたことは幸せで、同様の新たな目標を見つけるのは思ったよりも大変だということを実感している。願わくば、サッカーに教わったことを世の中に還元できるような人になりたいです。

自分と向き合った4年間

森本 志朗 （4年 メンタル）

短くも長くも感じられた4年間でした。この4年間を振り返ると決して楽しいだけではなく、ほとんどが苦しさだったようにも感じます。少しずつ自分のレベルが上がっていくことに喜びを感じつつも、リーグ戦出場への道のりが遠く、温度差を感じながら何かできることを探していた1・2年次は、目の前で逃した昇格や厳しい残留争いを経験する中で先輩方に必死についていきました。リーグ戦がすぐそこに感じられ、自分の価値も徐々に発揮できるようになった3年次でも昇格は叶わず、最もお世話になった先輩方に悔し涙を流させてしまい、自分の無力さに失望しました。

最高学年となり、一選手としてもア式の人間としても最高の1年にすると誓い臨んだ4年次ではチームの調子の良さとは反対に、全く結果が出せない自分とサタデーリーグに悩み考え苦しみました。そんな中、どうにかメンタルトレーニングの成果を1部昇格という結果にして出したいと様々なアプローチにチャレンジし、4年としてあるべき振る舞いや行動をすることで自分の価値を生み出そうとしてきました。私は4年間、直接リーグ戦の結果にコミットすることはできませんでした。それでも1部昇格に向けて人一倍努力してきたという自負があります。戦いを終えてそんな自分にねぎらいの言葉をかけてあげたいと思っています。

10月23日、私たちは36年ぶりの1部昇格を決めました。すべての努力、先輩方の思いが結実しました。恐らくあの日の出来事は一生忘れないでしょう。ただ私にとってもう一つ忘れられない日があります。それは前日の10月22日。サタデーリーグ東京農業大戦、Bチームの私にとっての引退試合です。全体応援で作り出されたあの雰囲気の中、90分サッカーをやれて本当に幸せでした。劣勢の中でも止むことのない声援を受けて全力でプレーできたことを一生忘れないと思います。

ア式という素晴らしい組織で大学生活を送れたことを誇りに思っています。本気でサッカーに向き合い、組織を良くするために一人一人が主体的に動くア式で、4年間もがき続けたことが財産となっています。来シーズン以降1部で戦う後輩は、関東リーグ昇格という目標を達成するため必死に努力すると思います。今の大学サッカー事情では、一橋が関東で戦うことを誰も想像していないと思いますが、我々ア式に関わる人間は本気で信じて応援しなければいけないと思います。OBの方々が今までご支援してくださった以上に、私も支援・応援していきたいと思っています。最後になりましたが、OBの皆様、年々増していくご支援・ご声援本当にありがとうございました。これからは私もOBとして、現役の活動を精一杯支えていく所存ですので、どうかよろしくお願い致します。

感謝

寺田 香穂 （4年 MG）

OBの皆様、昨シーズンは非常に多くのご支援ご協力をいただき誠にありがとうございました。特に昇格がかかった最終節には、200名を超えるOBの皆様方や保護者の方々、応援してくださる方々が会場まで足を運んで下さり、感謝の気持ちと長年このア式蹴球部が積み上げてきた歴史の重み、自分たちが成し遂げようとしていることの重みで胸が一杯になりました。

私は入部当初、サッカーもほとんど知らない状態で、このア式蹴球部に入部しました。高校までは自分が常にプレーする側だったため、入部してからすぐに、マネージャーという成果の見えづらい仕事のやりがいや目標の置き所の難しさを感じました。いま思えば見えては消え、消えてはむくむくと現れる目標を探し続けた4年間だった気がします。正直苦しいことの方が多い4年間でした。でも自分にとって、とても意味のある4年間でした。これまで歩んできた道の中で、といってもほんの短い人生経験ではありますが、一番意義のあるものだったなと思っています。
自分から動かなければ何も動かないことを学んだし、誰もが自分で考えて動くことを求められる環境の中で、素直に尊敬できる人にたくさん出会ったし、たったひとつの勝ちのために、どれだけの人が、どれだけの想いで動いて支えてくれているのかも感じたし、他にも数えきれないくらいたくさんのことを学んだ4年間だったと思います。

苦しいことの方が多かったけれど、最終節、首都大のグラウンドで昇格を決めたとき、これまでで見たことのないくらい多くの人で埋め尽くされる一橋の応援を見たとき、やってきてよかったと心から思いました。これだけ多くの人に応援してもらえるチームが、どれだけ誇りのあるものか、そして、その運営に関われるマネージャーの仕事が、どれだけ誇り高い仕事なのかを感じました。一見取るに足らないマネージャーの小さな仕事ひとつひとつが、どれだけ大切なものだったのか改めて気づかされた気がしました。私はこの4年間、決して褒められるような仕事をしてきたわけではなかったけれど、それでも最後まで続けたことに意味はあったと、あのとき4年まで続けると言った選択が間違いではなかったと強く感じました。昇格できたことも、もちろん私がそう思えた大きな要因に違いないですが、やはり大勢の方が見守ってくださっていた、あの素晴らしい環境で昇格を決められたことが大きかったと思っています。最終節での昇格はピッチの11人、70人の部員だけで戦っていたわけではなく、ア式蹴球部を支えてくれている人全員で戦って手にした昇格だと思っています。本当にたくさんの応援をありがとうございました。

集大成

山崎　光　（4年　MG）

2016年10月23日、首都大グラウンドの一橋サイドには、これまで見たことないくらいたくさんの人が駆けつけてくださいました。OB・OGの方々はもちろんのこと、部員の保護者・関係者の方々、一橋の他の体育会部活の人たちなど、本当に多くの方に応援していただけて嬉しかったです。そんな最高の環境が整った試合で勝って引退できたとは、なんて幸せなことだろうと改めて思います。試合終了のホイッスルが鳴った瞬間は、嬉しいよりもほっとしたというのが正直なところです。最終節の緊張感と1年間のプレッシャーから一気に解放されて、何も考えられませんでした。勝ったんだ、昇格したんだと落ち着いて思えたのは、対岸への挨拶をした後、入部してからお世話になった先輩方が喜ぶ姿を見てからでした。

私たちの学年はバランスが良いと言われることがありますが、決して最初からそうだったわけでも、自然とそうなったわけでもありません。時が経つにつれて、学年としてのまとまりが必要だと気づいて、一人一人が常にバランスをとっていたのだと感じます。昨季は、そのような私たち4年の雰囲気が全体にも伝播したチームでした。そのようなチームで、ずっとずっと手の届かなかった1部昇格を掴みとりました。でも、私たちは特別なことをしたわけではありません。一緒に戦ってきた毎年の4年生の背中を追いながら、自分たちなりに試行錯誤しただけです。何年も前に土に埋められた種は、長い間大切に育てられ、芽を出し、つぼみを付けていました。偶然にも私たちが4年生の時に、花を咲かせただけでした。

私は高校1年でサッカー部のマネージャーになってから、結局7年間もそのポジションにいました。振り返ってみると、マネージャーは私にとって天職だったと思います。一つ一つの取り組みは本当に地味なものばかりですが、プレイヤーと同じフィールドに立って、仲間として活動できることは誇らしいことでした。大好きなサッカーを目の前で見ながら、間接的にでもチームを強くすることが出来ると、ア式に入部してから強く実感することができました。その最後の年に、目標を達成することが出来ました。こんなサクセスストーリー、今後二度と経験できないかもしれません。来季からはOGとして応援する立場となりますが、現役の部員が有意義な時間を過ごせるよう願っています。最後になりますが、この場を借りて1年間応援してくださった皆様に感謝を申し上げます。本当にありがとうございました

⚽ 関東リーグへの挑戦 ～ 本編 第１章

赤星 真一 （平 4 卒）監督

表現に全くためらいが無かったとは言いませんが、以下は「関東リーグへの挑戦～序章」と題して 1 部昇格の手応えを 2 年前の酉松会新聞（第 8 号）に記した一文です。

『そのシーズンに関東リーグへ挑戦できる東京都 1 部で開幕を迎えることがスタートラインだとして、今はあくまで序章に過ぎませんが、今回このような紙面に記しても良いのかもしれないと感じさせる現役チームの“意志”が確かならば、程なくして本編のページが開かれることと思います。』

翌シーズン（2015 年）は、昇格の可能性を残した最終戦で、まさかの大量失点で 4-5 と敗れ、残念ながら昇格を逃がす結果となりました。続いての引用は、そのシーズンの 4 年生に後輩から贈られたアルバムに寄せた文章です。

『“本気で 1 部昇格を目指す”（当時の 4 年生）と臨んだ 1 年目の最終戦を覚えているだろうか。スコア 1-1 から 87 分に喫した失点。多くの選手が暫く立ち上がれず、応援のピッチサイドも沈黙、アディショナルタイムを含めて残り 5 分、チームは戦うことを“放棄”した。
“1 部昇格にふさわしいチーム”では無かった。1 部昇格への最後の挑戦となった今シーズンの最終戦。5 失点。多くの痛恨のプレー。普通には考えにくい事態。“重圧に負けた”と言えば簡単だけど、なぜなのか。それは“チームが成長し強くなった証”でもあったのだと、後輩たちが気付かせてくれるでしょう。』

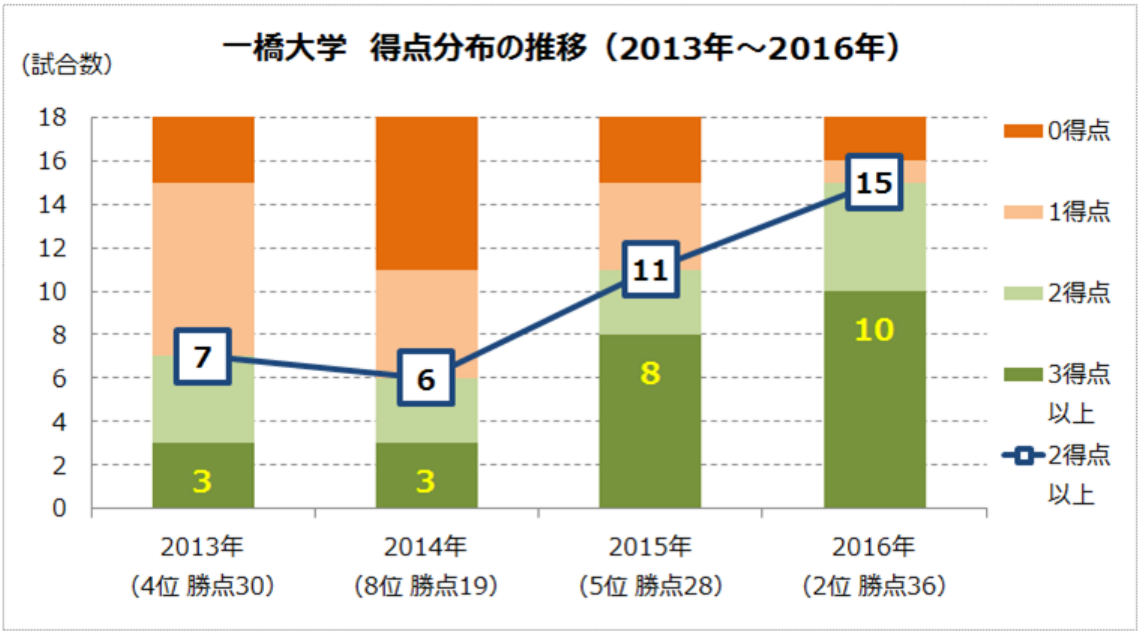
アルバムに寄せる言葉という趣旨からも、私からの押しつけではなく、過ごした 4 年間に自分達自身で想いを向けてもらいたいという気持ちから婉曲な言い回しをしていますが、手応えは更に強まっていたことを記しています。

そして遂に、昨シーズン（2016 年）に 36 年ぶりの昇格を果たした訳ですが、強まっていた手応えの一端は、祝勝会でも紹介させてもらった得点分布の変化にあります。この着眼点は、実は 2 部に昇格したシーズンから持っていたもので、2014 年のイヤーブックへの寄稿より抜粋引用します。

『2 部に昇格して迎えた 2012 年シーズン。試合途中で先行されたなかで、追いついた、あるいは逆転した回数が多い。逆境のなかでも崩れない、追いつき逆転する機会を狙える。試合の状況に対する集中力や忍耐力、チームの結束力などをベースとしたこの強みは、一橋大学ア式蹴球部で脈々と生きている伝統的なものでもあると思う。問題意識のひとつを言えば、格闘技ならダウンを奪う、あるいはノックアウトするということ。“追いつく、逆転する、1 点をもぎ取る”にとどまらず、更に“突き放す、勝負を決める”まで。言うは易く、簡単ではないけど、一段高いステージに向かうための重要な視点だと思っている。』

昨シーズンの、勝利した 11 試合全てでリード後の追加点があったという事実は、
一段高いステージに到達したことを裏付けるものの一つだと思っています。

得点分布の推移にみられる質的変化



- **2013年：ロースコアまたは接戦で勝点を拾う勝負強さ**
- **2016年：追加点を奪い突き放す試合運び** ※勝利した11試合全てでリード後の追加点あり

最後の引用は、1 部昇格を成し遂げた今の 4 年生に贈られたアルバムに寄せたものです。

『試合終了のホイッスルで最高潮に達した歓喜。その次にはどんな感覚が訪れただろうか。過去 3 シーズンの結末、4 年間のなかでの様々な苦悩、それらを乗り越えた 36 年ぶりの大偉業。こうした飾りを付けてみても何故か残る違和感、言わば“物足りなさ”だったかもしれない。それは、やり残したことの現れであると同時に、既に強くなっていたことの証でもあるのでしょう。美化されたプロセスに飾られたドラマを思い出にするだけでなく、“物足りなさ”の正体に向き合ってみるのも良いかもしれない。君たちと共に確かに成長したチーム、なおも貪欲に通過点の先を目指す後輩たちを見守りながら。』

こうした過去に書いた文章を晒してみたのは、都合のいい文章を眺めて昇格の余韻に浸るためでも、自分の感触が間違っていなかったことをひけらかすためでもありません。現役チームが関東リーグ挑戦のスタートラインに立つに至り、序章は序章として区切りを付けるための、言わば儀式のような気持ちからです。

挑戦とは、文字通り ”戦いに挑む” ということであり、challenge が意味する ”乗りこえる価値のある困難” でもあります。現役チームが、困難を乗りこえる覚悟をもって挑み、勇敢に戦ってくれることを信じ、引き続き支援していきたいと思います。

1部昇格チームの翌年成績（過去10年）

年	順位（2部）	チーム	翌年順位（1部）	備考
2006	1位	東京経済	10位	降格
2006	2位	玉川	6位	
2007	1位	立教	3位	※
2007	2位	学習院	7位	
2007	3位	明治学院	9位	降格
2008	1位	日大文理	10位	降格
2008	2位	東京経済	5位	
2009	1位	帝京	3位	※
2009	2位	東京	4位	
2010	1位	山梨学院	2位	※
2010	2位	明治学院	5位	

年	順位（2部）	チーム	翌年順位（1部）	備考
2011	1位	大東文化	9位	降格
2011	2位	成蹊	8位	降格
2012	1位	東京経済	3位	※
2012	2位	帝京	10位	降格
2013	1位	成蹊	7位	
2013	2位	大東文化	8位	
2014	1位	学習院	9位	降格
2014	2位	立教	5位	
2015	1位	東京経済	1位	※
2015	2位	帝京	8位	
2015	3位	東京	10位	降格

- **延べ22チームのうち、翌年降格となったのは8ケース（36%）**
  【内訳】 1位昇格：10チーム→4ケース（40%） 2位昇格：10チーム→2ケース 3位昇格：2チーム→2ケース（100%）
- **一方、関東大学サッカー大会進出※は5ケース（23%）、すべて1位昇格チーム**

今シーズンの抱負

吉田 圭吾 （3年 新GM）

今年一橋大学ア式蹴球部は1部昇格を果たすことができました。
それも1年間を通して引っ張ってくださった4年生の努力と、OB、OGの方々のご支援のおかげだと思っております。この場を借りてお礼を申し上げます。本当に有難うございました。1部昇格を果たすまでに36年という長い歳月を要しましたが、その過程に一橋大学ア式蹴球部が紡いできた歴史と伝統の重みを感じずにいられません。私が入部してからでさえ、1つの流れを感じ取ることができます。

1シーズン目は残留争いでした。しかし、その中でも若手を積極的に起用することで経験を積ませ、チーム力の底上げと来季の飛躍へと繋げました。2シーズン目は5位という結果に終わりました。序盤戦は連動して戦うことができず、なかなか結果が出ませんでしたが、後半戦の快進撃は、チーム一丸となって戦えば一橋にも昇格する力があるということを示すのに十分なものでした。そして迎えた3シーズン目は若手も上級生となり、経験を共に積んだメンバーが多く残る中チームの連携も高まり、シーズンを通して安定した戦いを見せ、1部昇格を果たすことができました。ここから推測するに、1部昇格は私の想像もできないような大きな流れの中で果たされたのでしょう。

そして、一橋大学ア式蹴球部は新たなステージに入り、次は関東を目指して戦います。
正直未知なる領域に不安もあります。どのようなシーズンになるのか全く想像もつきませんし、どれくらいの取り組みをすれば関東昇格を果たせるのかも分かりません。しかし、それでも私たちにできることは何も変わらないと思っています。それは与えられた環境で全力を尽くすこと、そして紡いできた流れを受け継ぎ、その上で自分たちの限界に挑戦し続けることです。その姿勢をGMである私が先頭に立って、この1年示し続けたいと思います。そして選手としても人間としても誰よりも成長し、愛あるこの組織を、これまで先輩方がそうして繋いできたように、少しでも良い組織にして次の代に託したいと思います。これが私の1年の抱負です。

OB、OGの皆様には来季も変わらぬご支援、応援をお願いしたいと思います。その気持ちに応えられるよう、部員一同一丸となって戦って参りますので、ぜひグランドに足をお運びください。必ず何かを感じ取って頂けるような戦いをお見せしたいと思います。1年間、応援よろしくお願い致します。

平穏・快適なクアラルンプール生活

角井 朋之 （平 11 卒）

2013 年 7 月よりマレーシアの首都クアラルンプール（KL）に赴任しております。勤務しているマレーシア味の素は Halal 認証の製品を製造し、マレーシア国内外に販売しております。周辺国だけでなく中東にも輸出しているため、多い時期は毎月どこかの国に出張しており、大変ですが良い経験を積ませてもらっております。

マレーシアは、人口約 3,000 万人、マレー系（イスラム教徒）60%、華人系（仏教徒）25%、インド系他（含む外国人）15%の多民族国家です（国の宗教はイスラム教)。地方では英語が通じないこともありますが、都市部では英語が通じる上、みなネイティブではないため片言英語でも生活できるのが日本人的には助かります。食事は、華人が多くいるため美味しい中華料理が安く食べられますし、日本より値段は高いですが、アルコール類も普通に手に入り不自由はありません。

最近の日本でのマレーシアに関する報道といえば、マレーシア航空機の墜落・撃墜事件、金正男氏の殺害事件と、良くない出来事ばかりではないかと思います。当地でも、たまにテロを計画していた IS 関係者が警察に逮捕されるニュースが流れたり、テロを警戒するメールが大使館から来たりと、海外ならではの緊張を感じる時はありますが、普段の生活は至って平穏です。また道路事情も他の東南アジア諸国と比べると非常に良く（バイクの量、騒音、交通渋滞等)、職場までは自己運転で 20～30 分、子供たちの通学はスクールバスで約 30 分、妻も買い物・学校のボランティア・趣味の活動に車を使いこなしており、車があれば極めて快適な環境です。

休日は、家族と買い物、コンドミニアムのプールで子供と遊ぶことが主な過ごし方ですが、KL 日本人サッカーチームの活動にも参加し、サッカーを続けております。昨年の J アジアカップ（年 1 回開催、各地の日本人チームが集まる大会）では、1 年下の後輩・朝倉君（ハノイチーム）とも再会しました。またシンガポール駐在のサッカー部 OB が出場する大会に参加し、小平でボールを蹴った仲間と久々に同じグラウンドに立つことが出来ました。卒業して 18 年になりますが、いまだにフルコートのサッカーを楽しめる（暑いので、かなりしんどいですが）のは、4 年間で培われたベースがあったからこそと思います。今年で 42 歳になり、スピード・パワーは衰える一方ですが、それを補うべく正しいポジショニングと正確なプレーを心掛け、またどこかで皆さんと同じグラウンドでプレーできる時までサッカーを続けていきたいと思います。

最後になりましたが、現役の皆さん１部昇格おめでとうございます。今年はさらなるレベルアップが求められるシーズンとなると思いますが、力を合わせて頑張ってください。皆様の活躍はFacebook で拝見、常夏の地より応援しております。

★J-Asia Cup にて H12 卒の朝倉君と

★シンガポール 日本人会サッカー大会後の打ち上げ

シンガポールの Team OB

諸石 央 （平 12 卒）

2013 年 6 月よりシンガポールの三菱商事の金属資源のトレーディング事業子会社に赴任しています。この子会社は自分が赴任したタイミングで設立されており、立上げから営業部局と悪戦苦闘しながら会社と苦楽を共にしていたら、あっという間に 3 年半が経ってしまいました。シンガポールの基本情報は割愛しますが、今いる会社のメンバーは、日本からの出向者、シンガポール人（大半が中国系、一部マレー系）に加え、インド人・オーストラリア人・フランス人・中国人・韓国人等々、非常に多国籍な構成です。内、ヘッドハントにより入社した業界経験豊富なプロフェッショナル人材は、国籍もさることながら、転職前の居住地である英国やノルウェーから家族と一緒に喜んでシンガポールに移住してきた人間が多く、シンガポールの整備された生活インフラあってのことだなと実感します。

週末は 3 歳半の娘と本を読んだり、おもちゃで遊んだり、アンパンマンのテレビを見たり、ひたすら一緒にいるとあっという間に土日が終わる、というパターンで、東京で 37 歳迄続けてきたサッカーも全くやってません。ただ 1 年半前から当地での日本人サッカー大会に、在シンガポールやインドネシア・マレーシアの酉松会の先輩・後輩と Team OB (One Bridge と OB から命名) を組成して参戦しており（さすがに 11 人は揃わず、一部は会社関係やサッカー仲間を動員してますが)、前々回は準優勝の成績を残しました。メンバーの帰任等も多く、半年に一度の大会の度に人数確保に苦労してますが、海外での酉松会交流の場として参加を継続すると共に、駐在生活の記念として一度は優勝したいと思っていますので、シンガポールや近隣諸国へ今後赴任される方は必ずご一報下さい。

★2016 年 5 月の日本人サッカー大会にて

⚽ 思い出あれこれ

神代 祥夫 （昭 29 卒）

☆祝意

1　酉松会新聞１０周年おめでとうございます。酉松会メンバーを繋ぐ方法としての効果はあると思いますので、今後も２０周年、３０周年と続くように、ご担当の方々のご尽力をお願いしたいと思います。私も同様の経験を中学高校時代の同窓会でしていますので、結構なことだと思っています。

2　現役学生のチームが、東京都リーグ 1 部に昇格を決めたことは、おめでたいことです。選手や部員の皆さんの努力の結果だと思います。

☆弔意

２月 4 日の新聞で、元日本サッカー協会会長の岡野俊一郎氏の死去が報じられました。彼とはほぼ同年代で、２つのことが思い出されました。１つは学生時代に東京大学と練習試合を御殿下グラウンドでやりました。多分、昭和 28 年前半だったでしょうか。彼と身長差で 10～15 cm 上だった石原慎太郎氏が、ヘディングで彼に競り負けていたのです。もう 1 つは昭和 57 年頃だったでしょうか、宇部興産（東京）で講話をお願いしたことです。当時は、まだ日本では関係者しかワールドカップのことを知りませんでした。彼は、期間中は香港に行って観ていると言ってました。

☆生活（寮関係）

1　入学（昭和 25 年）と同時に一橋寮に入寮しました。当時は、南寮（武道場）、北寮（部室）、西寮（新築）の 3 つに分かれていました。西寮が増設されて、南寮が閉鎖され、ついで北寮も閉鎖されて、西寮が「一橋寮」となりました。昭和 28 年からだったと思います。当時の寮生活のパターンは、１～２年生の 2 年間が一橋寮、３～４年生が国立の中和寮という形でした。しかし私は 4 年目の 1 年間を一橋寮で過ごしました。理由は、①国立でのゼミ、授業が週 3 日ぐらいに集約できたこと、②一橋寮の副寮監の了解が得られたことです。何しろ練習場所が、小平のグラウンドでしたから。

2　寮での食事提供は、朝と夜の 2 食だけ。昼は学生食堂で食べていたと思います。１～２年の朝食はパンとスープか、汁かけうどんでした。夕食は学生食堂で食べていたと思います。一橋寮が集約されてからは食堂棟も設けられました。寮での生活費は「寮費（共益費）」と「食費」ですが、食費は 1 年の時には 1 日当たり 40 円、4 年の時が 70 円だったと思います。１～２年の時には欠食すると「食事券」がもらえました。町では、この食事券がないと食堂を利用して「メシ」、「うどん」、「そば」が食べられず、この「食事券」は貴重なものでした。

3　成長する年頃ですから、寮の食事で不足する者は時々、外の食堂に出かけていました。小平分校の正門から多摩湖線の「一橋大学駅」（今は廃駅）までの 300m の距離の間に、２軒あったように思います（屋号は思い出せません）。

4　小平分校の西側の１～２km のところに「津田塾大学」の校舎と寮があり、２校の間には深々とした森林がありました。津田塾の学生が使う国分寺線の最終電車の時間は、多摩湖線より 30 分ほど早かったので、乗り遅れた津田塾生は多摩湖線を使い、一橋寮の寮生に送りを頼むという光景が時々ありました。寮生も帰りが怖いのか必ず複数で行っていたように思います。

5　また寮の北側は武蔵野台地で、「イモ畑」がたくさんありました。農村出身の学生が探してくるイモを蒸かして食べると、それが美味しかったことは記憶に残っています。

★現在は留学生の宿舎となっている「一橋寮」

☆財政について

1　入学して一橋寮に入ることができたのは、要するに懐が寂しいという点にありました。父も専門部の出身ですが、苦学生であったと思います。で、アルバイトは「家庭教師」。もう１つ、東京競馬場の仕事がありました。「競輪場」は農林省の主管ですが、アルバイトの者にまで給与の辞令が出ていました。お役所ですね。

2　２年以降は、日本育英会（2,100 円/月）と山口県の奨学金（1,500 円/月）を受けるようになり、若干の余裕が出てきただけ、サッカーにも打ち込めるようになりました。しかし、下宿するような余裕はありませんでした。育英資金も県の奨学金も、規定に従って、全額、返却しました。

3　当時の授業料は、年間で 3,600 円でした。実は卒業前に、未納付者の名前の張り出しがあり、慌てて支払いました。

4　社会人となって（昭和 29 年）、初任給は１万円程度でした。独身寮の食事代が、３食で 100 円でした。弁当を持っていくようなことでした。

☆サッカー部に関して

1　練習後の行動については、寮生活でしたから、特別なことはありません。ただ他の部員が、こんな話をしていました。①練習帰りに腹が減ったから、阿佐ヶ谷（高円寺）で下車してラーメンを食べた。②珍しくメンツが揃ったので途中下車して 22 時まで麻雀をした、とか。

2　富浦寮（平成 20 年に廃寮）は、毎年のリーグ戦が終わると出かけていました。内容は年度の活動の反省と新年度へのメンバーの引き継ぎでした。私は 1 年の時は不参加でしたが、 2 年以降は毎回参加していました。特に 2 年の時は、館山市（旧安房郡北条町）の小学校に 3 年の夏休みまで在学していたこともあって、そこに出かけて、叔父の存在を知りました。後に叔父一家とは様々な縁ができました。昭和 27 年 11 月には、その富浦寮でキャプテンに指名されました。

3　部員の住居について、私と同期の者の住居は自宅 2 名、下宿 1 名、寮 3 名でした。驚くことに 32 年卒業の 5 名は、全員が「寮生」ということでした。このようなことは珍しいでしょう。

☆練習や合宿など

1　私は不勉強なのか、三商大戦や合宿について余り記憶に残っていません。 4 年の時に、夏合宿で「禁煙」を指示しました。28 年 3 月に 7 名ものメンバーが卒業したこともあって、異例の合宿でした。しかしトイレで煙が上がっているのを見て、秋には禁令を止めました。

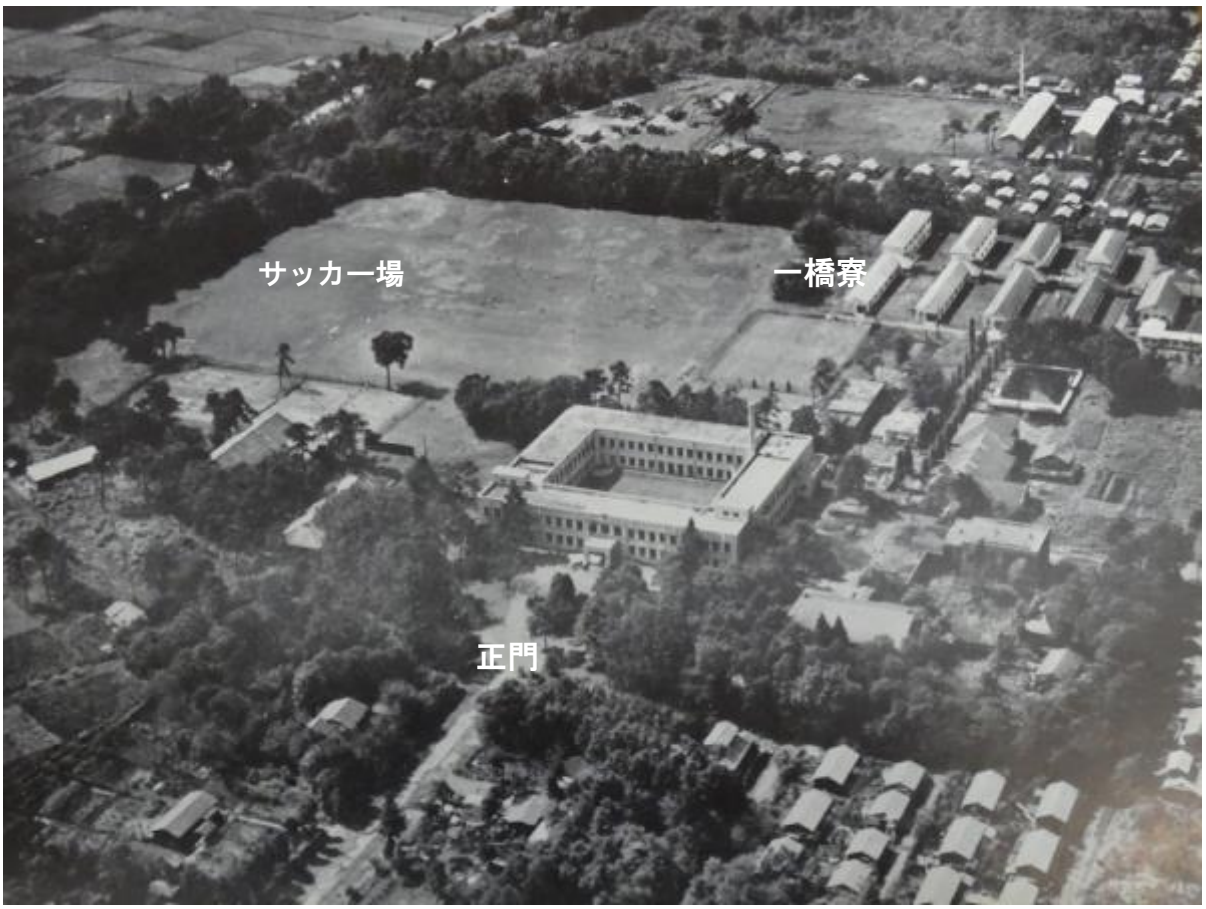
2　昭和 30 年の学生の夏の合宿には、宇部から休暇をとって参加しました。そこで、石原慎太郎氏が「太陽の季節」を発表したことを知りました。宇部に帰ってから本屋に掲載雑誌を探すように頼んだのですが、入手したのは翌年（昭和 31 年） 2 月の文藝春秋 3 月号の芥川賞の受賞発表でした。

3　昭和 36 年から 42 年までと 53 年から 58 年までは東京勤務でしたから、時間に余裕があれば小平の練習に付き合っていました。

☆部以外での活動

１～２年の寮生活の中で、特に記憶に残っているのは「産業研究会」だと思います。規約も活動内容も余り記憶に残っていませんが、ハッキリしていることの１つは「東芝・府中工場」です。とにかくトロリーバスが数十台並んでいました。中国・天津向けだそうですが、國共内戦でどうなるか分からない・・・ということでした。多分、国民政府からの受注だったのでしょう。もう１つはキリンビール鶴見工場で、工程を見学した後で、接待されたビールと塩豆の美味しかったこと・・・大満足でした。

★昭和初期に撮影されたと思われる小平分校の航空写真



かつては正門からまっすぐ続く道を 300m ほど歩くと、多摩湖線の「一橋大学駅」があり、
そのわずか 400m 先に（萩山方面）「小平学園駅」があった。1966 年（昭和 41 年）、
西武鉄道は混雑を緩和するために両駅を統合し、「一橋学園駅」を現在の位置に設置した。

（ウィキペディアより 編集長 記）

★正門から続く道の最後にある
T 字の交差点。ビル群の裏側に
「一橋大学駅」があった。
当時の駅前広場ロータリーの
名残を現在も見ることができる。

小平の想い出

橋本 昭一 （昭 31 卒）

そのころ、多摩湖線「一橋大学駅」は、校門と一本道で向き合っていた。
走ってくる学生を見ると発車を待ってくれる親切な車掌もいた。
道の途中には何軒か住宅があったが、お店は、たったの 2 軒しかなかった。

「学苑」

駅から向かって左側校門にほど近く、一戸建ての
小さな喫茶店があった。懐がいつも寂しくて、
滅多に入れなかった。
練習試合の帰りに先輩におごってもらった
ミルクセーキの味は忘れられない。

残念ながら卒業前に閉店してしまった。

「リンソバ」

駅のすぐ右前に店はあった。お店の本当の名前は
記憶にない。専ら通称は「リンソバ」。
名前の由来は聞いたことがあるが、あえて触れない。
肉などまったく入っていない、キャベツと麺だけの
ソース焼きそば。
その他にも何かあったと思うが、食べた記憶がない。
真顔のおかみさんに、
「橋本さん、国立へ行かないんですか？」
と心配されたのは、 4 年の春だったか。
とにかく 4 年間、小平に精勤した。

６０年以上前、今は遠い昔の話である。

★昭和 30 年（1955）春
三商大 vs 神戸戦

勝利直後の記念写真

★同三商大 vs 大阪？戦
一橋の得点場面

★昭和 27 年入学の
同期 9 名と

私のサッカー部生活

山田 充夫 （昭 40 卒）

1．入部

昭和 36 年、高校の時から入学したらサッカーをやろうと考えていたので入学と同時にサッカー部に入部した。我々の世代は、のちにメキシコオリンピックで活躍した杉山、釜本、桑田、松本等と同世代で、サッカーの興隆期であった。当時、一橋は関東大学リーグの 2 部に属し、メンバー8 校の中には、1 部と 2 部を昇降していた日大、順天堂、法政に続いて、東大、防衛、成城、上智、日体大、自由学園等がいた。実力的には優勝を狙うというよりも、絶対 3 部には落ちないということが至上命題であった。毎週末やってくる先輩たちも“今年は 3 部に落ちるのではないか”という強迫観念にかられ“練習が軽すぎるのではないか”というのが口癖のようであった。4 年間で一度だけ 3 部降格の危機があったが、入れ替え戦で勝ちかろうじて残った。入部したのは 17 名、高校でやっていたのは皆無という全く素人の集団であった。毎日の練習は基礎体力のなかった我々には非常にきつく、 1 年目の夏の合宿（妙高池の平）で半数が辞め、4 年まで残ったのは 6 人だけであった。当時の写真をみると、サッカーの恰好をしていたのはスパイクとストッキングだけで、着ているのは、まるでホームレスのようなものであった。2 年の途中から急きょキーパーをやることになり、毎日横っ飛びの練習で、肘、腰骨の痛みに耐えながらの練習となった。キーパーとして記憶に残っているのは、法政大学との試合で PK を止めたことぐらいである。4 年のシーズンが終わり、 ”何とか 2 部に残れた”というのが実感であった。

左から寺西、古川（故）、山田、朝来野（故）、白石、村林

2．生活

前期は小平の一橋寮に入居していた。食費は毎日 100 円（朝：うどん 10 円、昼：40 円、夕：50 円)。これだけで足りる筈はないが、金が有る時は 55 円のタンメン、或いは 120 円の定食で補っていた。金が無い時は、夜 11 時に寮で余った飯を 10 円で放出するので、競って（ジャンケン）入手して、部屋で飯盒で温めて食べた。奨学金（7,500 円／月）だけでは生活できないので 3 件（6 日／週）の家庭教師をやっていた。普段質素な生活をしている癖に、金が入ると、つい阿佐ヶ谷の馴染みのバーに行って使ってしまい、又々窮乏生活という繰り返しだった。1 日の生活は午前授業（主に語学)、午後練習、夕方家庭教師というパターンで自由な時間など無かった。

当時寮生の間で、ストームという遊びが流行っていた。酒を飲んだ勢いで、深夜津田塾の女子寮に忍び込み、学生の寝姿を眺めるという他愛のないものだったが、中には寮の周りで大騒ぎする者が居り、女子寮の寮監が新聞に苦情の投書をしたために物議をかもし、遂に学校側も“今後ストームを行った者は退学とする”という厳しい通達を出した。

レジャーといえるものは、1 年の時に友人と行った八ヶ岳縦走と、2 年の春休みに 1 年下の寮生と実行した東海道中膝栗毛（日本橋から名古屋までの徒歩旅行）だけであった。静岡県内では何軒か五右衛門風呂に入り、東海道新幹線の大井川橋梁工事を見たのが印象的であった。後期は中和寮に入ったが、半年で退寮し、東京に勤務していた兄と目黒で下宿した。

下宿代は、当時畳 1 畳 1,000 円が相場で、8 畳の間で 8,000 円であったが、食費も入れると寮生活より出費が嵩み、又又窮乏生活となった。助かったのは同期の朝来野君（故人）が見かねて時々自宅（高円寺に両親と住んでいた）に呼んでくれたこと。ある時、彼から“君は魚が好きなのでサンマを沢山買って置いたら 10 匹も食べたと、母が驚いていた”と言われた。

3．卒業 / 試験

4 年の最後の試験で大失敗をした。寝坊して商法の試験をミスってしまったのである。ギリギリの科目しか取っていなかったので卒業には科目不足となった。既に住商に内定していたが、追試験は 7 月になり卒業も 7 月になると言う。已む無く住商の採用担当に電話して事情を説明すると“折角採用したんだから 7 月まで待つよ”という。ほっとしてもう一回科目数を見直したところ、夏の合宿中に行政法（市原助教授）の試験を受けたことを思い出した。合宿中だったので駄目だろうと思ったが、念の為先生に聞きに行くと“私も昔サッカー部の顧問をしていたよ”と言われ無事単位を取れた。そのようにして無事卒業でき就職できた次第。今だに時々、卒業試験会場で何処に行ったら良いのか分からず、うろうろしている夢を見るのもこんな事情があるから。

★1970 年代の国立駅周辺

学生時代の思い出

小林　治　（昭 53 卒）

学生時代の思い出と言われても、記憶が遠い彼方にある為、断片的にしか思い出せないので、話があちこち飛びますが、ご容赦下さい。

大学 1 年の夏合宿は菅平だった。菅平会館という所に泊まりフォワード部屋に配属された。生まれて初めて、他人にパンツを無理やり脱がされた。確かあの時、犯行に関わっていたのは、当時 3 年生の克さんやバック部屋からなだれ込んで来た 2 年生の言さんだったと思う。福さんもいたような気がする。その前に血祭りに上がっていたのが、確か 2 年生の安部さんだった。大学サッカー部で生きていく為には、こういうことにも耐えていかなくてはいけないのかと思った。

コンパでは「鉄腕アトム」の余興を習った。当時はくだらないと思ったものだが、これが結構社会人になってから役立った。53 年同期は、全員お互いの結婚披露宴に呼ぼうということをコータローが発案し、それが掟となった。それで披露宴では、いつも全員で「鉄腕アトム」をやっている。また個人的には就職後の会社の宴会で使わせてもらった。いい社会勉強ができたと思う。

1 年の時の授業の思い出。サッカー部の同期皆で、福田平先生の「刑法各論」の試験を受けた。同期の中で法学部はコータローと私の 2 人だった。私以外の他のメンバーはコータローが「自信がある」というので、コータローの答案を写した。私は取り敢えず自分で答案を書いて、C で通した。私以外のメンバーは全員落ちた。その後、彼らは再試験を受けて A で通った。コータローは A で通ったと言って私に自慢していた。

また「経済学総論」の授業を受けていて、先生が、「白書なら何でもいいから読んで、試験の時、その白書について記述するように」と言われたので、私は「警察白書」を生協で買って読んだ。別の日にサッカー部の同期の栗原君に聞いたら、「それは経済学についての白書のことだ」と笑われた。仕方がないので「中小企業白書」を買って読んだ。今から考えると、自分ながら「アホだなあ」と思うが、その時は先生に「経済学に関わる白書」と言って欲しかった。

春合宿は、小平の合気道場で寝泊りした。食事は近所の食堂（名前は日の出食堂だったかな？）を使い、風呂も近くの銭湯だった。何というお風呂屋だったかは覚えていない。確か当時、先輩の篠崎さんがその食堂のお嬢さんを家庭教師で教えていて、そのお嬢さんが、その同期の誰かに憧れているというような話を聞いたように思う。

大学 2 年の夏合宿は那須だった。やたら、ブヨが多い土地だった。
同期の池田君はブヨにむちゃくちゃ咬まれて、脚の形が変わっていた。

昭和 50 年（1975）
藤和不動産の那須サッカー場で夏合宿

大学 2 年の時、入れ替え戦（当時は関東の 2 部にいて毎年下との入れ替え戦に出ていた。場所は駒沢競技場だった）で残留が決定し、祝勝会で試合後、帰りに渋谷で飲みに行った。飲んでいたら、バーテンからやたら高い値段を吹っかけられた。私は頭に来て、「直ぐ出よう。」と言ったら、同期の浅井君が言葉少なに「ちょっと待て」と言っておもむろに水割りを 1 杯飲んでからその店を出た。浅井君の落ち着いた態度に、すごい大物だと思った。

いつだったか忘れたが、これも試合後に同期皆で飲みに行った時、確か新宿の歌舞伎町辺りだったと思うが、地下のスナックみたいなところに入った。メニューを見たら、一杯がやたらに高い値段だった。これはまずいというので、皆で直ぐに店を出て事無きを得た。歌舞伎町の怖さを、その時初めて知った。

大学 3 年の夏合宿は山中湖だった。この時初めて洗濯機の使い方を 1 年上のセメルさんに教えてもらった。イモケン（津田塾大学の女子マネ）が付いて来てくれていて、体力が抜群で朝の長距離走も一緒に走っていた。1 年上の養田さんと 1 年下の大西君は負けていたそうだ。この両名共、今ではゴルフは抜群に上手い。走る才能とゴルフをする才能とは違うようだ。

山中湖での夏合宿の時、また被害に遭った。私の誕生日は 8 月 9 日で、丁度合宿中だった。
その日の夕食後、いきなり先輩の言さんと福さんに押さえ付けられて、お腹に赤チンで
「Happy Birthday 22 to Kobayashi」と書かれ、写真を撮られた。

大学 4 年の時、新入生歓迎コンパを国分寺駅前の店でやったのだが、新入生の高木君が泥酔して倒れてしまい、救急車を呼んで病院に担ぎ込んだ。吉祥寺の救急病院だったと思うが、同じ病室に成蹊大学のサッカー部員（確か、渋谷君といったか）が入院していて（彼はサッカーで骨折していたと思う）、びっくりした覚えがある。それはともかく、今だったら急性アルコール中毒事件で大問題になったと思う。当時だから何事もなく済んだのだろう。高木君の同期に聞いた後日談だが、高木君のご実家は九州の有名な造り酒屋で今ではそこの社長さんをやっているとのこと。良かった。

大学 4 年間で合コンは 2 回しか参加していない。1 回は法学部の好美ゼミの仲間の吉村君がアレンジして、相手は津田塾の探検部だった。もう 1 回はサッカー部の深谷君のアレンジで学習院短大だった。その後、話が続いたということは耳にしていない。 1 つ下の学年は国立音大と合コンをして、何組か結婚したと聞いている。

国立にはあまり思い出がないが、国立駅南口を出て左手に、東南方向へ斜めに向かう道がある。何通りというのか覚えていないが、その道沿いに「国立スカラ座」という映画館があった。
授業を抜け出して 1 人で出掛けた。
「マイフェアレディ」を見た。
隣に女子大生と思われる 2 人連れが座った。
ただ、それだけだった。

「国立スカラ座」

公務員さんは呼べんじゃろう

田中 耕太郎 （昭 53 卒）

我が家には家訓がある。「朝酒昼酒は禁ず！」。おそらく祖先の誰かが朝酒昼酒で、どえらい失敗をしでかしたに違いない。一方夜酒には全く制限がついていない。“夜”の定義は「日が暮れる」ということである。従って大きな柿の実のような太陽が武蔵野台地にすっぽりとお隠れになると今日はどこで飲もうかということしか頭になかった学生時代である。大嫌いだった玉ネギや刺身やおでんが食えるようになったのも酒のお蔭である（とはいえ、肉が一番）。酒は誠にありがたい神様からの贈り物である。

田中耕太郎

我々の新歓コンパが荻窪であった。新入部員が代わる代わる先輩達に挨拶し、一気飲みなどが静かに始まった。１年上の先輩には芸達者が多かった。殿様ガエルのように喉を震わせアカペラでムード歌謡を唄うキムさんや、千葉出身なのに何故か武田節を唄う安兵衛さんや、普段のアトムの髪型のまま踊り付きで鉄腕アトムを唄うフクさん等がいた。我々の代に、そんな洗練された芸ができる者はいなかった。何もやらない我々に、諸先輩達の目が静かにプレッシャーになってきた。そこに１人の勇気ある猛者が手を挙げた。「芸はないので、醤油を飲みます！」というが早いか、どんぶりに醤油をなみなみ注いで一気に飲み干したのである。彼は飲み終わるとニコニコ笑って席に着いた。一瞬の沈黙の後、拍手の渦。しかし、渋谷君の頭も胃も腸も既に激しく渦を巻いていたのである。何年か後に同様のことで死んだ者がいるというニュースを聞いた時は、ゾッとした。とにかく、その時は警察も救急隊も呼ばずに済んだのは誠に神様のご加護に違いない。

その夜の渋谷君は散々だった。彼の家は国立で荻窪から高尾行に乗ったのだ。ぐったり寝てしまった彼は高尾まで行ってしまった。高尾で東京行きに乗った。また寝てしまった。東京に着いてしまった。東京で立川行に乗った。立川まで行った。立川で東京行きに乗った。東京に着いてしまった。その時既に最終電車がなくなっていた。酒ではなく醤油を飲んだ勇者をさらに神様はいたぶった。ふらふらと電車を降り、さらに階段を降りようとした時、踏み外して下まで転げ落ち大怪我をしたのである。彼が二度と醤油を飲まなかったのは言うまでもない。

渋谷耕一

五座哲也

４年の夏、学芸大と試合をした。勝ったか負けたか。どんな試合だったか、とんと覚えておらん。覚えているのは１年後輩の五座が、やたら無謀なスライディングを繰り返していたことだ。効果がないのは本人も分かっているだろうに、ただ単に自分を痛めつけているとしか見えないのだった。その夜、何故か小生の家で４年数人、３年数人、それに津田塾のマネージャー２人が飯を食い酒を飲んだ。五座の酒のピッチが異常に早い。彼は早々に酔いつぶれてしまった。それで彼を２階の小生の布団に寝かせて、我々は持ち回り怪談（渋谷はいなかったので「階段」ではない）をやった。誰かの話が、とても怖いものだった。

「ヒュー、シュルシュル！ そこへっ！」というタイミングで、「ウー、ウー、寒い、寒い・・」という呻きが遠くから聞こえた。「うへぇ、なんじゃ、こりゃあ !?」暑い夏の夜にもかかわらず皆凍りついてしまった。山原（残念ながら物故）が「２階から聞こえるようじゃが・・・」皆でそっと階段を上がり小生の部屋の扉を開けると、五座が体を丸くして「寒い、寒い」と震えながら呻いていた。小生の清潔で真っ白な（？）シーツが彼の胃液で、こんがりチョコレート色に変わっていた。「こりゃいかん、急性アルコール中毒じゃ！」生まれて初めて消防署に電話し、救急車を呼んだ。

真夜中の２時頃、救急車は静けさを引き裂くようなけたたましいサイレンを鳴らしながら、すっ飛んできた。救急隊員は手際よく五座を車内に運び入れ、山原が付き添いで乗り込み、必要以上に大きなサイレンを鳴らしながら去っていった。静寂が戻った玄関で見送っていたのは我々だけではなかった。近所の人達も何事かと寝巻姿で出てきていたのだ。我々はその人達に深々と頭を下げ、すごすごと家に帰って寝た。

五座は結局、軽症で済んだ。マネージャー曰く、「彼は失恋したんですって」
うーん、早く言ってよーー！ 救急車事件の翌朝、小生は菓子折りを持って近所周りしたんだからね。とにかく酒飲むのは、なんぼでも飲みんさい！ じゃけど、公務員さんを呼んじゃいけんじゃろう、というお話でした。

1978 年の夏の日、小平グラウンドで

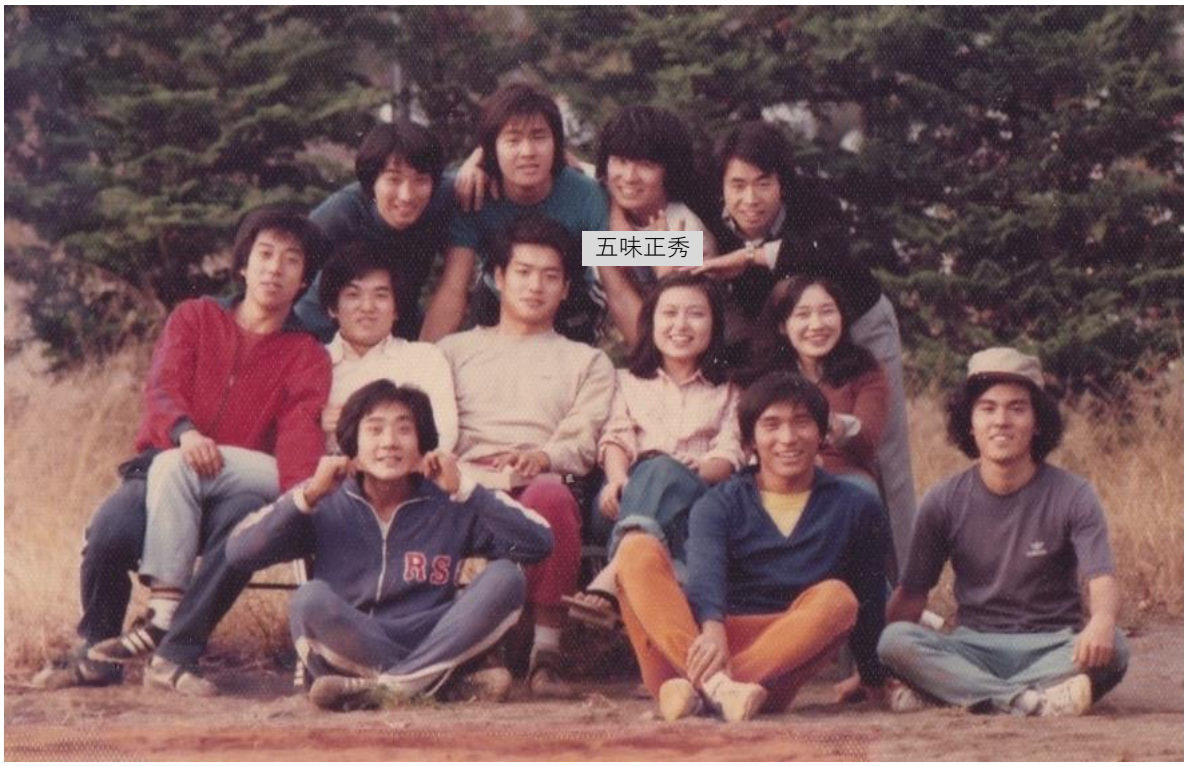
五味 正秀 （昭 54 のはずが、昭 55 卒）

５時に近いというのに一向に手加減する気配のない太陽のもと、グラマネの笛は容赦ない。昨今流行りの「ゲータレード」（粉末を水に溶いて使用）は、経済事情から試合時しか用意されない。監督を置かず学生だけで運営している一橋ア式蹴球部、「水分摂取禁止」というほどアタマは旧くない。適宜グラウンド隅の水道に群がる。しかし、そうしたチームメイトを横目で見ながら、乾いた土を頬につけヨレヨレの練習用シャツで汗をぬぐう数名がいる。彼らは練習終了予定前 30 分から決して水分を取ろうとしない。練習終了。道場脇のシャワールーム。旧いが湯は出る。が、狭い。数も少ない。順番なんか待ってられるかと、件の数名は部室前あたりの水道で、アンダーショーツ１枚になり体を洗う。ここでも水は飲まない。部室の床は歴代の先輩たちの“遺留品”である古いシューズが散乱しているうえに、いわゆる土間。埃っぽいこと甚だしい。これも先輩直伝の「椅子上立ち裾持ち片足伸ばし方式」で器用にズボンを穿くと、その集団はまっしぐらに小平キャンパス正門方向へ向かう。

直線道路をまっすぐ行くと学園西町交番、その左隣が今日の彼らの目的地「鳥辰」（現在も営業中）。実は練習前に約束がなされていた。「鳥辰集合、な」カウンターに並んで座り、「ビール、小ジョッキから順に」ジョッキが出されると一気に飲む。ものの数秒で飲み干し、中ジョッキ、そして大ジョッキに。その頃焼き鶏が出てきて、やっと普通の飲みのペースとなる。だれともなく、「甘くてうまいなー、ビールは」体中の水分を練習でカラカラになるまで絞り出し、まるでビールと全部入れ替えるかのような状況である。仕上げは特大ジョッキ（さらにもう１ラウンド、という猛者もいた）。

これが、この頃の“ア式蹴球部呑兵衛仲間”定番のビール作法。うまかった、とにかくうまかった。もし人生に「ビールをうまいと感じる指数」みたいなものがあったとすれば、最高数値は、この夏のものではないだろうか。ひたすらサッカーをし、体に思い切り負荷をかけ、何にも考えずにビールを流し込む・・要は、ただのビールバカそのものではある。やがては卒業、就職、散り散りバラバラになる前の、つかの間のはかない時間、ということも大きくその味わいに影響していたと思う。携帯もネットもない時代、グルメ情報などに踊らされることもなく身近で自分たちがうまいと思えばそれで良し。これは逆に幸せだったのではないかとも思う。

鳥辰を出て解散。麻雀メンバーは交番挟んで数軒先の雀荘「ロン」（こちらはもう閉店、看板は残っている）へ。ここで「藤乃木」さん（今も元気に営業中ですね）からカツ丼の出前を取る。ガッツリ練習→鳥辰ビール→ロンで麻雀→藤乃木からカツ丼出前。至福の黄金コースでした。カツ丼の味？聞くだけ野暮ですね。食べるのに夢中で何度アガリを見逃してしまったことか・・・


五味正秀

麻雀ロン
蘇乃木

とんかつ
蘇乃木

★1970 年代の一橋学園駅周辺

飲み会 2016

大口 柾文 （4 年 GM）

飲み会のあり方も今昔で相当変わったのではないかと思います。昔はリーグ戦が終わった後、決まって国分寺の葱凱牡、通称〈じゃがー〉に集まり朝まで飲んだと伺っています。〈じゃがー〉は、今も年に 2、3 回は行くでしょうか。それでも全員ではなく、お酒が好きな何人かで行く程度です。70 名を超す大所帯ですので、そもそも〈じゃがー〉には入りません。国分寺南口は養老乃瀧のまずいビールで我慢したり、小平キャンパスの合宿所を使って騒げば警察が飛んできたりと、全員で飲むのも一苦労でした。

応援歌と手拍子と共に 4 年生が入場、全員ビールで乾杯、後輩が並んで次々にビールを注ぐ。一息ついて着席すると応援歌のオンパレード。歌いやすく覚えやすい応援歌をもらったが最後、延々と歌われ飲まされ後半戦をトイレで過ごすことになります。全員この場面で歌が歌われて飲まされるという暗黙の了解があるのですが、中にはいつまでたっても歌われない部員も。70 名超なので一周するだけでも 1 時間半はかかりました。つまみが食い尽くされた頃にようやくこのコーナーが終わると、テーブルごとに色々な飲み方にわかれます。鏡月片手に激しくゲームをするところ。泣き上戸の後輩の話を聞いてあげるところ。マネージャーに群がるところ。酔うと熱くなる四年生の話を聞きつつ、厳しい指摘を受けて涙する後輩たち、等々。みんな均一に酔いがまわって一番楽しい頃です。共同墓地ゲーム、山手線ゲーム、愛してるよゲーム、全力パミパミゲーム、スーパーマリオゲーム・・・時には即興で新しいゲームが生み出されます。右も左もわからない頭で必死に食らいつき、理由もわからず飲まされます。

大体そこから 1 時間もすると人数はぐっと減ります。終電が早い人、あんまり飲みたくない人、帰りたい人等はここらへんで帰り、半分くらいになります。残ったメンバーはどうかというと、3 つに分けられます。あたりかまわず眠ってしまうもの。べろんべろんになりながらも飲み続けるもの。裸になって暴れまわるもの。とても OB の皆さま、ひいては親御さんにはお見せできません。飲み会の最終盤の光景は今も昔も変わらないのではないでしょうか。 4 年間色々な飲み会をして、本当に色々なことがありました。思わぬ事件が起きたり、一発芸に馬鹿笑いしたり。そして絶句するようなカミングアウトがあることもしばしば。部活をやっていく中で特に楽しみなイベントでありました。どうか後輩にもこの伝統を受け継いでほしいと思うばかりです。

私が選ぶ ア式グルメ BEST 5

普勝 悠暉 （4 年 イベント応援）

私のトレードマークと言えば食だと、アシキに関わる多くの人間が言うでしょう。激しい運動をしつつも黄金比を保てたのは日々の修練に違いありません。ということで、私が 4 年間で行った店を、コスパ・量・味・通いやすさ・サッカー選手として適切かなどの項目から採点し、ベスト 5 でも作成しようかと思います。

ベスト 5　国立「深川つり舟」 ・・ デカ盛りの丼物で一橋大の学生に人気の店

★穴子天丼 1,350 円

コスパ：やや悪し。1500 円が目安。
量：ご飯、味噌汁はお替り無料なので腹一杯にはなる。
味：お金を変える価値はあり。美味し。
通いやすさ：国立なので、行けない学生はいないでしょう。
サッカー選手として：試合前の生ものという点を除いて、非常に良いと思われる
総評：普段はやや高いが味、通いやすさを考慮すると十分上位に食い込める。
ただランチに 1500 円は痛すぎた。涙の 5 位。

ベスト 4　中野「ハヤシ屋中野荘」 ・・ 昔懐かしいレトロな洋食屋

★名物オムハヤシ 880 円

コスパ：良し。800 円もあれば十分。
量：現役には、やや物足りないかもしれない。
味：十分通えるレベル。後輩に引き継ぎも済んでいる。
通いやすさ：中野は少しユーザーを限定しかねない。
サッカー選手として：問題ない範疇である。むしろパスタもあり、困らない。
総評：コスパも味も相当優秀である。パスタなど 600ｇまで頼めるのだから、空腹な貴方はこちらを。４年から始めた中野開拓であるが、十分に食い込むほどのパフォーマンスを発揮した。惜しむべきは、やはり中央線ユーザー限定といったところか。

ベスト３　新宿「溶岩焼ダイニング bonbori」　・・ 富士山の溶岩石で焼く焼肉店

★牛ハンバーグステーキ 溶岩流 1000 円

コスパ：良し。ランチが 1000 円で食べられる
量：普通。ただし満足させてくれる量である。お替り無料。
味：非常に良し。食べた時の口の中がフィーバー。
通いやすさ：新宿なのは残念だが、中野よりもアクセスしやすい人は多いだろう。
サッカー選手として：ライスも食べ放題だし文句ナシ。
総評：１度しか行けてないが倍額払ってもいいほどに美味かった。夜は高級鉄板焼きに替わるため使っている肉も上質。是非チーズをトッピングして欲しいとＫ氏も言っていた。

ベスト２　渋谷「ぶたキム」　・・ 肉屋が経営する素材厳選の焼肉店

コスパ：やや悪い。食べ飲み放題、5500 円。しかし、このクオリティなら納得
味：美味。和牛の何たるかをしっかりと教えてくれる
量：満腹になるまでご堪能ください
通いやすさ：渋谷なので行けないことはない。値段的にも何かの記念に。
立地が平成女学館前なのがデートに誘いづらいところ
サッカー選手として：やや脂質は高いが若者アスリートに肉と酒は付き物でしょう。
総評：学生に 5500 円はきついかもしれない。だけれども一度体感してみて欲しい。年を取ると和牛もきつくなる。美味しさを体感できる今だからこそ、ここで肉を腹いっぱい堪能してほしい。若者に栄光あれ

ベスト１　小田原「うなぎ亭 友栄」・・ 2012 年ミシュラン１つ星を獲得した名店

上うな重（きも吸・おしんこ付き）4800 円

コスパ：高い、しかし補って余りあるクオリティ
味：何も言うまい。体感せよ。
量：十分満腹になる。どうせ長期休みの追いコンくらいしか行く機会はないのだから、量など気にしないで質を楽しめ。
通いやすさ：上述した通り追いコンやないと厳しい。
サッカー選手として：精力つくし、ビタミン豊富だし、良し。
総評：食べログナンバー1 の偉業を達成するに余りある味だった。4 年間通えなかったのが残念でならない。ウナギ嫌いがウナギ好きになる 1 品。サービスも非常に良い。
私が行った時はコメントも忘れ、気づいたら重箱はからになっていた。情報提供者の A 氏には多大なる感謝を。

最後に、まあこんな感じで自由に書いてみましたが、脳内データベースにはスイーツから串カツまで、チェーンに頼らない本物のお店がそろっていますので、是非私にお尋ねください。最近気になるのは目黒のミシュラン１つ星店です。そろそろミシュランを堪能せねばと思う今日この頃、長い文章にお付き合いいただきありがとうございました。

甘利燃ゆ

松井 基宏 （4 年 新歓）

甘利知己（あまり ともき 4 年生）は考えた。
何かが足りない。その何かを、だ。おそらくの見当はついている。華だ。生活に華が足りない。つまりは彼女やそういった類のものだ。夕日が富士山にかかるのを武蔵野線の中で横目に見ながら知己の思考は深まっていく。
「環境のせいにはしたくないが、一橋で部活に所属すると彼女は出来にくくなるな。それは、浦和高校時代には男子校でラグビーボールのようなヘアスタイルをしていてもガールフレンドがいたのに、今風な髪型をして BEAMS のお洒落な服に身を包み、高時給アルバイトにより富を手にした僕に彼女がいないことから考えても自明だ。唯一失ったものは、埼玉県白岡の大地で育んだ〈素朴さ〉くらいであろう。新白岡の駅に着いたが、何となく降車する足が重たい。それは、よりによってこの日は上下 BEAMS を着ているからだろうか。変わってしまった僕が、この町に受け入れられていない気がする。バツが悪い。とは言っても華を手にするために素朴さは必要であろうか？そうとは思えないが、何かを得るためには何かを失わなければいけないことは世の常であり、その取捨選択により人生を決めてきた。外語大を選択していたなら、今に美人なバイリンガルと交際していたであろう。」
一橋を選んだ。これが 1 年生の知己である。

甘利知己は振り返った。
足りないものは新たに探して発見せずとも案外手持ちにあったりするのだ。IPhone 連絡先一覧をスクロールしてみる。女の子だけを一定の基準を設け脳内でソートし高速でスクロールする。検索結果上位には馴染みのある名前がはじき出された、元彼女だ。少しためらいはあったが、意を決してメッセージを送ってみる。
「久しぶり、お元気ですか？」
知己は、基本シャイなのだ。ふっと気が抜けベッドに横たわったら、ブルッと足に振動を感じた。携帯を確認してみると、あの子からの LINE だ。すぐに来た返信に興奮と緊張とを感じつつも、内容を確認する。
「久しぶり！！元気だよ！！ともは？」
そうだった、この子にだけ知己は‘とも’と呼ばれていた。当時の感情が雨後の小平グラウンドの土のごとく頭に入り込んでくる。心は昔に一気に逆戻りし、最近感じていなかった甘酸っぱい感情に心地よさを覚えながら、その日は眠りについた。後日そのまま流れに身を任せ、知己は復縁した。だがしばらくして、また別離した。一度付き合ったのにも理由があるが、それと同じく別れたのにも理由があり人はなかなか変わらないのだ。知己は 3 年になろうとしていた。

甘利知己は気付いた。
突然の告白をされた。後輩マネージャーからだ。知己はというと、何度か合コンを経験して、
「埼玉の白岡に住んでます！」
と自己紹介するとき、県外はもちろん埼玉在住の相手からも認知されていないということにも慣れてきた頃であった。突拍子もないことであった。浮かれる心を必死に沈めて友人に形式上の相談をする。本心では即答でイエスなのであるが。知己は 4 年になってもシャイなのだ。
やはり、なかなか人は変われない。工事現場が目に入り、国分寺の駅の改修工事はいつ終わるのか、そんなどうでもいいことを、これまた形式上考えて平静を装い返答した。
「まあ・・」
知己はシャイな上にかっこつけでもあるのだ。まあ、かっこいいのだけれども。そうして、バイリンガルではないが（もしかしたら話せるかもしれないけど)、一橋でかわいいと評判の香苗ちゃんと付き合うことができた。知己は一橋を選んだのだ。

三商戦の思い出

寺田 香穂 （4 年 MG）

1 年目の三商戦は大阪市立大学で行われました。三商戦の前日はオフ＝移動日とされ、自由行動でした。学年ごとに遊ぶのが慣習でした。1 年目でまだ学年の中にも多少よそよそしさが残る中、私達の代は青春 18 きっぷで行く組、同期の実家に泊まる組など様々に分かれました。私は 5、6 人で同期の実家に泊めさせていただきました。飼い犬のニコちゃんが非常にかわいかったこと、応援歌を歌いながらみんなで自転車に乗ったこと、偶然やっていた花火を見たこと、どれもが懐かしいです。 1 日オフではせっかく大阪に来ているのに、なぜか観光はほとんどせず、ラウンドワンに行きました。すると 2 年生も大阪に来ているというのにラウンドワンに集合していて、ア式の人の考えることは本当に同じなんだなと思いました（笑)。大阪でも当時流行していたビリヤードで盛り上がっていて、本当に楽しそうでした。ラウンドワンで同期や先輩としたバレーボールやバドミントンが楽しかったこと、それも三商戦のいい思い出です。

2 年生の三商戦は台風で中止でした。小平までわざわざ来てくださった大阪市立大、神戸大の選手達には、ただただ申し訳ない三商戦でした。

3 年生の三商戦、これは非常につらいものでした。この年から、せっかく関西まで行くなら向こうのいつも対戦できないチームと試合をしようということで、三商戦は「関西遠征」となりました。広島に 3 日間滞在し、移動して 5 日間、京都・大阪・神戸での試合。広島修道大学や甲南大学など他大学のセミナーハウスにもお世話になりました。ごはんは各自自由、広島から関西への移動手段も自由など、合宿とはまた違ったものでした。この年は学年ではなく、マネージャーで行動を共にすることが多かったです。広島でお好み焼きを食べたり、京都で泊まったホテルが豪華でポーズを決めて写真を撮り合ったり、大阪で流行のチーズケーキを食べに行ったり、後輩マネージャーと奮発して神戸牛を食べて銭湯を探し回ったりと、楽しい思い出がたくさんありました。同時にこの年の関西遠征はスケジュールが非常にタイトで、けがをする選手や体調を崩す選手が出るなど満身創痍でした。でも苦しい苦しいと言いながらも乗り越えて、 1 、 2 年マネの仲がギュッと縮まった 8 日間は、ア式で過ごした 4 年間の中でも楽しい思い出です。遠征最終日に行われた三商戦、その帰り道で見た神戸大からの夜景はすごくきれいで、良い遠征の締めくくりでした。

4 年目の三商戦はレセプションでの一発芸のイメージが強いです。一橋の一発芸は、この 4 年で麻布高校出身者がやるという伝統ができていました。毎年ネタが非常に下品で、他大学のマネージャーからも引かれていました。でも正直一橋は、どの大学よりも一番体を張っていて面白くて毎年優勝だったと思います（笑)。

私のいた 4 年間だけでも大きく形は変わった三商戦でしたが、OB 戦に来てくださる OB の方々が楽しそうにサッカーをしたり、関西に住んでいて普段お話できない OB の方が話しかけてくださったりすることは毎年変わらないものでした。これからは OB として参加する側になりますがこれからも末永くこの伝統が続き、いつか時が経った時に私達の代全員が集まる三商戦を迎えられたらなと思います。

★後輩の女子マネたち　2017-2-01 郷土の森グラウンドにて

“外岡先生”の胴上げに涙

山崎 彰人（昭 49 卒）

一橋大学ア式蹴球部の伝統とは、学生が自分たちで考えて戦略・戦術を展開し実践して、その結果について全て責任を負うところにあったと思う。我々の現役時代はサッカーがまだマイナースポーツの最たるものであり、その技術・戦術については、また聞き以外に情報がなかった時代だった。高校からサッカーを始めた選手が多く、高く掲げた目標を達成するには素材も経験も他校に劣る一橋ア式蹴球部の運営は、そもそも自分たちの立ち位置を認識するにも困難を伴い、常に悲壮感に溢れていた。我々の拠って立つところは、狂気に近い目的達成のための意思の力しかなかった、と言っても良いくらいだった。現在の現役のア式蹴球部運営を見ていると、幼少の頃からサッカーを始めているという競技歴の長さの違いと共に、Jリーグ発足以来、プロの球団経営が下部組織や学校教育にまで浸透した結果、我々の時代に比べるべくもない運営レベルに達したのであろうと感嘆している。

我々の時代は理解力と集中力を武器に、大物食いを毎年果たしてきたものの、プロのレベルの監督やコーチ不在の中で、最上級生にかかる負担は大きかった。我々の監督だった外岡先生は、そのような状況をよく認識しておられ、学生に対する対応は現実的であり、また何よりも慈愛に満ちていた。当時の酉松会では精神論を中心に現役強化を口にする方が多かったが、酉松会創立者である松本正雄大先輩と共に、外岡先生は現実をしっかり認識されていた。従って指導のコメントに戦術・技術についての注文は殆どないが試合や練習に臨むあり方について的を突いたものが多かった。また部員一人一人をよく観察され指導も行き届き、学生の人望は殊の外厚かった。
練習後、試合後の外岡先生の言葉がどれだけ励みになったか、どれだけやる気が出たか、言い尽くすことは出来ない。

自分たちが最上級生の時、浦和駒場サッカー場で行われた入れ替え戦で、幸運にも上智大に２－０で完勝し、関東大学リーグ２部に復帰を果たすことが出来た。真っ先に外岡先生のところに全員で駆け寄り胴上げをさせて貰ったが、その時、眼鏡を外し、満面の笑みでゆっくりと歩み寄ってこられた姿が忘れられない。そして胴上げをしながら、「このために、外岡先生を胴上げするためにやってきたんだ」と涙が溢れたことも、また忘れられない。

卒業後、お目にかかるたびに外岡先生と呼ばせて頂いた。「馬鹿、先生は止めろ」と何度も怒られた。でも、自分にとっては外岡先生なのです。外岡先生、本当にお世話になりました。最後の挨拶ができなくて無念の極みです。来世であの素晴らしい笑顔に、またお目にかかれることを楽しみにしております。

夫婦を繋いだ“仲人さま”に感謝

木村　武志（昭 52 卒）

サッカー部員として公私に亘り大変お世話になりました。外岡夫妻には我々夫婦の結婚式の仲人をお願いしました。家内とは大学 3 年の終盤の 2 月、英国での短期留学の際に出会い交際が始まりました。その後、家内は東京での就職を目指していたのですが、出雲出身で東京に親戚や知人がおらず、身元引受人がいないということがネックになって内定が貰えず、東京での就職を諦めかけていました。そんな折に外岡さんにご相談した処、直ぐに知人に声を掛けて頂きご自身も縁のある『国際工機』への就職を斡旋して頂きました。その上に東京に慣れない家内の住居までお世話頂きました。そのアパートは私の入居が決まっていた独身寮のある清瀬の一つ手前の東久留米でした。このことが我々夫婦の婚前同棲、そして翌年の結婚に繋がったのは外岡先輩のシナリオ通りでした。正に名実共に仲人様です。

挙式に当たって我々に、各自の自己紹介と出会いの経緯を書いたものをとのリクエストがあり、かなり盛った内容のものをお渡ししたのですが、当日は原文をそのまま読まれたので恥ずかしく、家内共々赤面したことが懐かしく思い出されます。子供たち（女、男、男）も無事に成長し、微力ながらも社会に貢献できるところまで参りました。昨年 2 月に国立の施設でお会いした際には、大病はされたものの、まだまだお元気で安堵しておりましたが、今年お会いできなかったことを後悔しております。今後も外岡先輩のシナリオに沿って夫婦ともに良い歳を重ねていきたいと思います。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

粋な“親戚のおじさん”へ

五味 正秀（昭 55 卒）

学生時代、何かの時に「五味という名字は諏訪だよね」と外岡さん。「良くご存じですね」と返すと、外岡さんの「旧制松本高校」時代の親友のご実家が、何と僕の実家と数軒しか離れていないことが判明。幾度か訪ねられた際に、そうした“地域ならではの豆知識”を仕入れられたことを楽しそうに話してくださいました。それ以来、勝手に親近感を抱き、親戚のおじさんのように、お付き合いさせて頂きました。

僕らの代が 4 年の時のリーグ戦。東京 2 部から 1 部への復帰が視野に入って来た頃、外岡さん（昭 23 卒）と森重さん（昭 24 卒）が「1 部に復帰できたら、どんなご褒美でもあげる」と仰ったので、その場の調子に乗った挙句、 ”柳橋の料亭で芸者を揚げる”ってのはどうでしょう」などと小説などで読みかじった ”ふとどきな提案”をした記憶があります。「面白いこと言うねぇ。いいよ、判った」とお二人は笑っていらしたのですが・・・1 部復帰は達成したものの、あの話は冗談に過ぎないと思っていた僕らに、お二人から「約束だ。みんなで料亭に行こう」大学 4 年の“洟垂れガキたち”に、その価値も真髄も分かるはずがないのに、気前よく“粋の世界”を覗かせてくださいました。今思い出すと、まさに、汗顔の至り、です。

後年、ア式蹴球部出身のマスコミ関連の人間たちで、「ひざまくらの会」なる同窓会を度々開きましたが、外岡さん、森重さんお二人あればこその温かい会だったと思います（ね、土井さん、福本さん）。ア式蹴球部の先輩であり、何となく親戚のおじさんであり、社会人のアニキ、でした。外岡さん、先に行ってらっしゃる森重さんと久しぶりの杯を交わしてますか。しばらく待っててください。「第 2 期ひざまくらの会」、そちらで絶対やりましょうね。

外岡さんとの出会いが人生の起点

佐藤 博子（昭 55 卒　女子マネ）

夏休みの遺跡発掘で知り合ったマリンコ姐（今関真理子・昭52卒の女子マネ）に「小平に行ってみない？」と言われ好奇心でついて行った日、何をするのかも知らず女子マネと呼ばれるようになりました。初仕事は 9 月18日開幕の関東 2 部のリーグ戦で、東大の御殿下グラウンドに「とにかく行く」こと。何度目かの御殿下、家から至近ゆえ母までが興味本位で遠巻きに見に来ました。丘には外岡さんがいらして、サッカーなど？？の母にまでお気遣い頂き、話せば母と同じ大正11年戌年生れ、今の私より若い53歳でした。以後、外岡さんは皆と同様私にも、時にはそれ以上気に掛けて下さり、家も近いし息子の家庭教師やらないかと声をかけてくださったり、旧制高校OBの試合に連れてってくださったり、4 年制女子の就活厳しい秋、全く決まらないのを知って、森重さんのお話を聞きに連れていってくださったり、受けている先を訊いては伝手を探してくださったり、父が生きていても、そこまで出来まいというほどのご支援を頂きました。

五味くんの文にある「柳橋の料亭」は俵屋といい「芸者を揚げた」その日は1978年11月16日。まだ就職が決まらない私の誕生日でした。そこで外岡さんは自ら太棹を弾いて歌い、森重さんと大人の（男の）遊びを見せて下さいました。カッコよかった！最後に 1 人一言挨拶をという時、「私の誕生日に、このような盛大な会を催して頂き誠に有難うございます」と言うと、「それだけ図々しければ、どこでも大丈夫！」と皆に励まされたものです。

なんとか12月に、富士ゼロックスという創立17年の会社に内定しましたが、実は外岡さんが私の知らないところで、富士ゼロックスにいらした義理の弟さんにご尽力頂いていたことを 3 次面接の場で知りました。おかげさまで入社式は新人代表になりましたよ、外岡さん！ 配属先で柳橋は私の営業テリトリー。行くたびにカッコイイ外岡さんの三味線が目に浮かびました。

４年後、辞めるの辞めないのと騒いだ時も転職先まで探してくださいました。結局私の我儘で残り、今年の11月に定年を迎えました。同期の女子31人、定年まで勤めたのは３人だけです。思えば、社会人の私は全て外岡さんに出会えたことが起点でした。お世話になった分を全然お返しできないうちに逝かれてしまったんだな、と今更ながら悔やんでいます。外岡さん、ありがとうございました。どうぞゆっくりお休みください。あっ、やっぱり休んでなどいられずサッカーしてますね、きっと・・・

★最後の観戦・・2013年6月23日 小平グラウンドにて

編集後記

10 年目を迎えて

福本 浩 （昭 52 卒） 編集長

今回もたくさんの方が寄稿してくださいました。厚く御礼申し上げます。
10 年目ということで新たに「私の学生 LIFE・今昔」というテーマを設けましたが、期待以上に面白い原稿が寄せられました。それぞれの世代の「時代感」が浮き彫りになり、人間味あふれる体験談にも触れることができました。酉松会は 20 代から 80 代まで、様々な世代の人間が集まる稀有な組織です。この酉松会新聞が、より広く深い交流を築くための一助になればと思います。

２月初旬、久しぶりに小平グラウンドを訪ね、現役たちの練習を見学しました。
彼らの密度の濃い合理的な練習メニューに驚きましたが、それにも増して小平グラウンドの砂漠化と荒廃ぶりに驚きました。人が住まなくなった家がアッという間に荒れてしまうように、使うことが少なくなったグラウンドも生気を失っていきます。ホームグラウンドで試合も練習も満足にできない今の学生たちには、我々が持っているような小平グラウンドへの愛着・郷愁は、もはや無いのかもしれません。寂しい限りです。多額な費用が必要となりますが、なんとか小平グラウンドの人工芝化を実現し、1 世紀にならんとする一橋ア式蹴球部の歴史と思い出を守りたいものです。皆様のご理解とご協力を切にお願い致します。

ところでグラウンドを見た後、部室はどうなったんだろうと思い、見てきました。私がいた頃（昭和 48～52 年）は木造で床は土間。ロッカーなどなく、各自ダンボール箱に衣類を入れていました。
埃だらけの汚い部室でしたが、現在は鉄筋コンクリートの 2 階建て。床にはマットが敷かれ、一応、土足禁止。しかしロッカーはなく、汚さ、埃っぽさ、乱雑さも相変わらずでした（笑）。

平成 28 年に、 6 名の大先輩が逝去されました。
奥村一郎さん（昭 21 卒）、外岡諒三郎さん（昭 23 卒）、木滑 勇さん（昭 27 卒）、
宮田幸三さん（昭 29 卒）、福江睦朗さん（昭 31 卒）、石綿浩之さん（昭 39 卒）、
謹んでお悔やみを申し上げます。

私が現役だった頃、サッカー部の監督をされていた外岡さんには、公私にわたって大変お世話になりました。誰よりも小平グラウンドに足を運び、誰よりも後輩の進路を気にかけ、誰よりも一橋サッカー部を愛した先輩でした、酉松会新聞の第 1 号にも寄稿しましたが、外岡さんの依頼で私が作った「応援歌」があります。最後に敬愛する先輩を偲び、一緒に歌いたいと思います。
外岡さん、ありがとうございました。安らかにお眠りください。

1　東京は西のはずれ
　　われらが学園西町は
　　粋な男の集まる所
　　今日もシュートの花が咲く
　　ああ 一橋　一橋　サッカー部

2　春はまぶたも重く
　　好きなあの娘のひざまくら
　　ずっとこのまま寝てたいけれど
　　やっぱりボールが恋人さ
　　ああ 一橋　一橋　サッカー部

3　夏は合宿の汗
　　朝から晩まで真っ黒け
　　夜空の星にあの娘が笑う
　　明日はグラマネ布団むし
　　ああ 一橋　一橋　サッカー部

4　秋は心が騒ぐ
　　今日から地獄のリーグ戦
　　勝った負けたに泣き笑い
　　四年の苦しさ切なさよ
　　ああ 一橋　一橋　サッカー部

5　生まれは違うけれど
　　サッカー通じて集まって
　　酒と女とマージャンと
　　わが一生の良き仲間
　　ああ 一橋　一橋　サッカー部